

41492

教科書文庫

4
810
41-1929
200030
1421

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

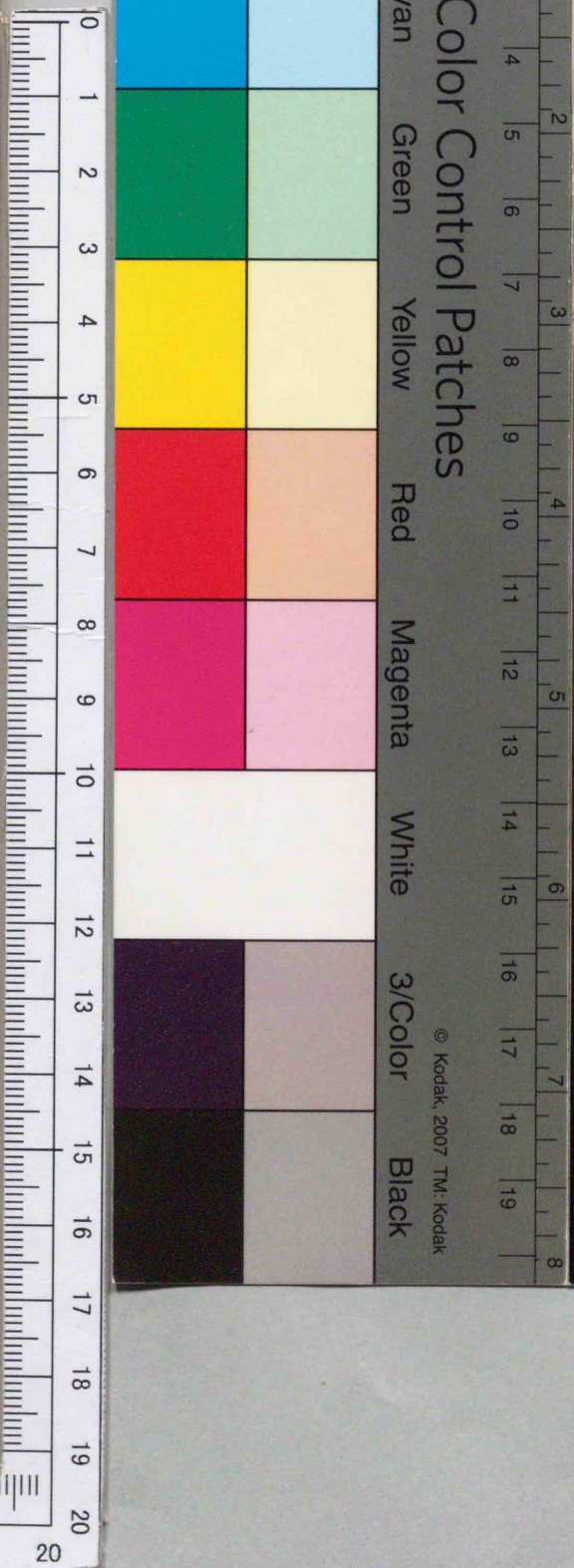


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Ue4
資料室

國語讀本

改訂版

卷九

資料室

3759

Ve4

日五廿月三年四和昭
濟定檢省部文
用科語國校學中

國語彙本 卷九

昭和改訂版

文學博士

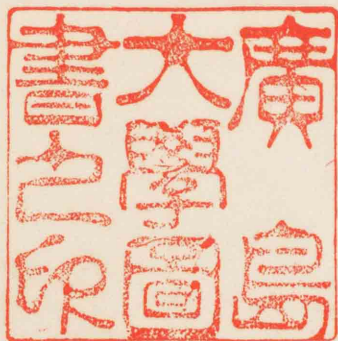
上田萬年

榮田猛猪

鹽野新次郎

編

共



國語讀本 卷九

目次

前篇

一 當今の憂 徳富蘇峰 一

二 冥想の樂 黒岩周六 七

三 草枕 夏目漱石 五

文章道と漱石先生 森田草平 三

四 梅の花(和歌) (古今和歌集) 二四

古今集序 紀貫之 七

五 國歌と國民性 田邊尚雄 六

六十訓抄

(十訓抄) 五

七俚諺論

大西祝 四

諺語七則

四

八千貫目

井原西鶴 七

西鶴の文章

佐々政一 五

九人生は戦である

和辻哲郎 五

十山庵雑記

北村透谷 五

二藝術家

横山有策 六

晚鐘

高山樗牛 七

三我が國の繪畫

藤岡作太郎 五

三いさよふ月

阿佛尼 六

月の異名

六

四東路の旅

(東關紀行) 六

五麒麟

谷崎潤一郎 六

六寂しき心(詩)

生田春月 二

七菅公の左遷

(大鏡) 二四

菅公の天分

高山樗牛 二三

八人生の快事

三宅雪嶺 二三

後篇

擬古文抄

一

擬古文に就いて(参考)

佐々政一 一

賀茂翁家集

賀茂真淵 四

一 箱根山

一四

二 村田春郷墓碑

六

うけらが花

加藤千蔭 八

一 泊酒舎にて蓮を看る辭

八

二 蟲選の詞

一〇

三 隅田川の秋雨

一三

四 山里の月

一五

琴後集

村田春海 一六

一 琴後集序

一六

二 泊酒舎の記

一八

三 知足庵の記

一九

四 睦月ばかり山里人の許へ

二二

五 祭芳宜園大人墓文

二三

泊酒文藻

清水濱臣 二五

一 萩をめづる詞

二五

二 擣衣を聞く

二七

三 縣居翁の墓參會に

二八

閑田文章

伴 蒿 蹊 三

一 情は新しきをもて先とす

三

二 冬のころ

三

三 大森求古の故國に歸るに寄す

五

年々隨筆

石原正明

六

一 花と紅葉

六

二 上野

四

三 朝夕

四

松の落葉

藤井高尙

四

一 ものしりびこ

四

二 ものまなび

四

三 論語

四

檀園文集

中島廣足

四

一 閑中春雨といふを

四

二 燕を題にて

四

三 秋山

四

四 山路の菊

四

五 氷

四

六 埋火

五

七 漁村

五

八 岸頭待舟

五



——（筆天彩村田）宵 春 池 鳳——

目次

九 夜學

一〇 書といふを題にてかける詞

八

五四

五



國語讀本 卷九

前篇

一 當今の憂

徳富蘇峰

申
五
石田貞美
山陽中學校

日本帝國の運命は、唯日本國民の自力に據りて支持せられ、繼續せられ、開展せらる。吾人が自力主義を主張するは、畢竟我自ら我を恃むの外に、方便も手段もあらざればなり。即ち千百の方便手段ありとするも、そは自力主義踐行の後、に於て、始めて其の效用を見るべければなり。

然りと雖も、吾人が所謂自力主義は、決して自滿主義にあ

一 當今の憂

自力
他力

徳富蘇峰
名は猪一郎、
熊本の人文
章家

長を採り短
を補ふ
採長補短

らず、自足主義にあらず。何ぞ況や鎖國主義をや、排外主義をや。吾人は我が短を補ふべく、世界のすべての長を採らざるべからず。吾人は飽くまで籠城割據の風を破りて、世界ご歩趨を一にせざるべからず。而もこれ唯内に自ら主持する所ありて、而して後、外に向つて之を求むべきのみ。

獨得
獨特

吾人は我が國民が精神的に獨立し、而して後、世界的に協調せんことを望む。精神的の獨立とは何ぞや。日本國民は日本國民として、其の獨得の立脚地に於て、内外一切の經綸を定むること是なり。東洋の獨逸にあらず、東洋の英國にあらず、日本は即ち東洋の日本としてなり、日本の日本としてなり。即ち我自ら我が固有の歴史的系統に則り、我自

漫滿
々々

進一轉
進一步

ら我が國民的見地に據りて其の裁斷を下すにあるのみ。此くの如く、内既に主持する所あり、乃ち外に向つて其の益を求む。必ずしも英米といはず、必ずしも獨佛といはず、世界の長は皆採つて以て我が有る爲すべし。また何をか顧慮し、何をか遲疑せん。

惟ふに我が國當今の憂は、第一、國民の情氣滿々たるにあり。別言すれば、國民猛志を消磨し、小成に安んずるにあり。曰く、日本は既に五大國の一に位せり。曰く、日本は既に東洋の盟主たり。曰く、日本は既に富强なり。而して更に磨礪自彊、此の國運を進一轉せしむるを閑却しつゝあるなり。第二は、世界の大勢を根本的に謬解せるにあり。曰く、

葛藤
紛糾

ウイルソン
ビルマ戰役及
び歐洲戰爭に
於て偉勳を奏
したる將軍

瞞着
糊塗

自家擁護
言行不一

世界は泰平なり、今後は戦争らしき戦争は絶無なるべし。國際的の葛藤は、國際聯盟のために自動的に按排せらるべし。彼等は待つあるを恃まず、其の來るなきを恃み、其の恃むべきを恃まず、恃むべからざるを恃むなり。吾人は今其の妄想たることを説破するまでもなく、茲に英國の參謀總長ウイルソン元帥の言を引證すべし。曰く、吾が大戦最中に於て屢耳にしたる「今次の戦争は、爾後の戦禍を杜絶するの戦争なり。將來は唯平和あるのみ。」この言は、畢竟人を瞞着したる妄言にてありき。看よ、現在に於ても世界の各所に、二十乃至三十の戦争行はれつゝあるにあらずや。果して然らば、吾人は今後の戦争に向つて、大いに準備する所

孤立
積極的

識認
認識

世界大戦の結果
四ヶ月前にドイツ降参

なかるべからず。我が帝國の前途は實に危殆なり、不安心なり。これ英人に與へたる訓戒なれども、採つて以て我が訓戒となすに足らずや。第三、我が日本帝國は世界に孤立せり、孤立といはんよりも、寧ろ世界の多くのものより排斥せられつゝあるなり。これ必ずしも日本國民の罪のみいふべからず。而も其の原因は何處にあるにせよ、事實は正しく此くの如し。而して我が國民は、此くの如き不愉快なる事實を正視し、識認し、之に處する所以を講ぜざるは何ぞや。第四、我が國民は物質的に驕慢となり、精神的に萎縮せり。退いて自力の足らざるを慚ぢ、自國の缺陷を補ふことを勗めず、進んで世界に向つて自國の真相を闡明し、世

日本の後継者としての理由

人種の色、宗教の道、言語の道

利即の筆名

苟安
偷安

界の誤解を正すことを努めず、唯其の日暮しに、一時の苟安を偷取しつつあるは何ぞや。第五、一寸の蟲にも五分の魂あり。如何に世界の迫害を被むることも、我が國民にして自ら道義的大自信あらば、何をか懼れ、何をか憚らんや。今日の憂は、日本帝國が世界的迫害の中心たるにあらずして、日本國民の道義的自信力の失墜にあり。

扶植
扶持

蓋し吾人が自力主義といふものは、内に國民の道義的自信力を扶植し、先づ自ら不敗の地を占め、而して後、徐ろに外に向つて我が志を行ふにあるのみ。此くの如くして世界と協調を保つべく、此くの如くして東洋の盟主たるべく、此くの如くして、世界の文化に貢献し、我が大和民族の天職を

日本の世界に三頁獻すべし、事蹟、本西三州の融合、不危人種、のり、カ、洋人の被るべき

全うす

糊塗
彌縫

全うするを得べきのみ。今日の如く、我が國民自ら信ぜずして他を信じ、自ら頼まずして他を頼み、放恣怠慢、強ひて自ら欺きて眼前を糊塗し去らんごす。此くの如くして止むなくんば、我が帝國は精神的に滅亡せざるを得ざるなり。豈戒心せざるべけんや。(大戦後の世界と日本)

二 冥想の樂

黒岩周六

黒岩周六
土佐の人、涙香と號す、萬朝報主筆、大正九年歿、年五十九

書生二人、一室に坐す。偶、窓外に音あり。鐘鼓の響くに似て、又衆人の喧噪を聞く。これ東京にありふれたる廣告行列の過ぐるなり。一人は喜び起ちて窓に到り、行列の音樂を聞き、行列の盛粧を見て、樂むこと甚し。一人は端坐し

て動かず、默然として想ふ。行列の物音にだに心附かざるものゝ如し。

既にして行列去る。窓に立ちて樂みし者は座に復りて身を横たふ、聊か疲れたる色あり。これ樂みの盡きたるが爲なり。端坐する者は依然其の容を改めず、默然の中に得る所あるに似たり。

是は以て、聲色の美を外外に求むる者、無色無形の想を心に味ふ者との差を示すべからずや。外外に求むる者は物と共に樂しみの盡くることあり。内に求むる者は盡きざるなり。盡きず、故に此の人や倦むことなし。盡く、故に彼の人や疲色あり。

無限
内身精神、心心、心、心
外身物質、目目、目、目

是の事を知りしものは
常た 常た

エルネスト
ヘケル
十九世紀中頃の
自然科学者。

目睹
目撃

美の付くもの
カントの言
無限の
新考の打撃

世人多くは歡樂を形色の美に求めて、冥想に無盡の樂あるを知らず、不幸なるかな。それ冥想する者は窮する時なし。一室も天地なり、財無きも富み、事無きも樂し。凡そ心頭に浮動するもの、一として味ひて以て深く造化の祕目録に到り觸るべからざるはなし。獨逸の學者エルネスト、ヘケルは科學が前人の未だ知らざる「美」の新世界を發見し得たりと稱し、顯微鏡下に幻出する小宇宙を寫眞にして世に公にしたり。世人は實に小宇宙の美、平常目睹する所の大宇宙を凌ぐものあるに服し、美を樂むの道の一進歩なりと稱せり。小宇宙の美に接するは「涉獵」の區域を大宇宙に限れるに比して一の進歩なるには相違なし。然れども何ぞ如か

んや、哲人が更に遠く心界の領分に入りて、無限の美を顕微鏡だにも達する能はざる所に求むるの、更に大なる進歩なるには。

余は思ふ。人の事業の最も大なるは品性の修養にして、而して修養の最も大なるは冥想に得べし。冥想は單に美、單に樂と云ふのみに非ざるなり。冥想する者は樂みの中に修養を得るなり。蓋し人の一身に三の我あり。饑ゑて食はんご欲し、悲しくして泣かんご欲するが如きは一の我なり。此の性は禽獸と通有なり。故に獸我と稱す。獸我を制御して宜しきを得しむるは人の性格なり、所謂品性なり、人の人たる所以のものなり。之を人我と稱す。彼の

egaism

自我主義

動物我、獸我

人我、人我

神我、神性

人我は四百兆の細胞より

行爲

動機、觀念、意志

性善説、孟子、ルソー
性悪説、荀子、ホッブズ

人我

獸我より發する様々の欲望のうち、人我と相合するものが採用せられて、我的實行實動となる。心理學者の稱する動機即ち是なり。動機とは獸我と人我との調和點なるに外ならず。故に、人、獸我強くして人我弱ければ、則ち動機低くして其の行禽獸に近し。之を墮落と云ふ。品性の最も下なる者なり。人我強くして獸我に勝つ人は即ち人並の人たるなり。性格あり品性あるの人なり。
たゞ人我と獸我との分量は、之を天に享く。生れながらに定まれるなり。然らば天分に於て人我甚だ少くして獸我獨り強き人は不幸なり。天を恨むるの外なかるべきか。曰くこれ修養の意味ある所以なり。我は生れながらにし

顧省

て人我少し、修養を以て人我を多くせざるべからず。
 先づ自ら省みよ、我の天分は人我多きか獸我多きか。
 斯くして人我の少きを知らば、之を慨き之を悲しむの心起
 らん。此の之を慨き之を悲むの我は何者ぞ。人我なるか、
 獸我なるか。曰く人我に非ず、獸我に非ず。宛も人我が獸
 我の上に立てるが如く更に人我の上に立てる我なり。之
 を神我と云ふ。人は獸我をば人我に屈從せしむる程度に
 從ひ、人らしくなりゆくと同じく、更に人我をば神我に從は
 しむるの程度に從ひ、神々しくなりゆくなり。見よ人にし
 て人並以上の崇高なる行動を發し、人並以上の偉大なる事
 業を遂ぐる人あることを。神我に依らずして焉んぞ之を

行動 舉止

ego 我、
 人我、
 人我に非ず、
 獸我に非ず、
 人我なるか、
 獸我なるか、
 人我の上に立てるが如く、
 更に人我の上に立てる我なり、
 之を神我と云ふ、
 人は獸我をば人我に屈從せしむる程度に
 從ひ、人らしくなりゆくと同じく、
 更に人我をば神我に從は
 しむるの程度に從ひ、
 神々しくなりゆくなり、
 見よ人にして
 て人並以上の崇高なる行動を發し、
 人並以上の偉大なる事業を遂ぐる人あることを。

トと云ふ也
 生んて

得んや。

更に問ふ、生れながらに神我の弱き人は如何にするか、更
 に神我の以上に某我ありて、神我を救ふか。曰く、これ我が
 所謂冥想なり。人は冥想して神我を養はざるべからず。
 孟子曰く、我善く吾が浩然の氣を養ふ。彼が浩然の氣
 と云ふものは神我なり。彼や神我に於て餒ゑず。故に能
 く孟子たるを得たり。心を靜かにして獨り思へ。一輪の
 花は如何の顯微鏡を以てするも、竟に彼が何の機關を以て、
 如何に之を活動せしめて、地より、空より、日光より、養分を吸
 ひ、色を奪ひ、力を採れるやを知るべからず。南山の戰、得利
 寺の役、天地を動かす活劇なりと稱せらるゝ雖も、吾人が一

富貴 不能
 貧賤 不能
 威武 不能
 屈辱 不能

孟子曰く、
 我善養吾浩
 然氣。(孟子
 公孫丑上篇)

南山得利寺
 南山は關東
 州附近、東
 利寺は滿洲
 京省にあり、
 共に日露の
 激戰地の役

知
此の世に
彼より小なり

造化
造物

カントの相
吾等の程度を打
つものトニつ
一序中の偉大
二人作の正し

日諦視して、猶ほ何の變化をも看取し得ざる爪の延びんが爲に、時々刻々に戦へる細胞の戦争の慘澹たるに比すれば、彼の此れよりも小なるは、常人が此の彼よりも小なりと思ひ做せる割合よりも更に小なるなり。思うて極の極に至れば、至小無内の内に至大無外の外を藏するを知り、造化絶妙の機微、直ちに人の神我と接觸して、我の此の世に来れるの偶然ならざるを知るなり。汝の神我をして造化の絶大なる力に觸れしめよ。神我は自ら奮ひ起りて、其の熾なるこそ永久に滅せざる火の如くならん。神我をして斯くの如くに極の極に接し到らしむるもの、冥想の手段を措きて何かある。之に頼るものは貧しきにも苦まず、饑渴にも餒

るざるなり。又形色の美の外に、味ひて盡きざるの歡樂あらん。之を余の冥想論と爲す。

三草 枕 三評に採 夏目漱石

夏目漱石
名は金之助、
東京の人、
學者、大正五
年歿、年五十

山路を登りながら考へた。

智に動けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば

窮屈だ。さかくに人の世は住みにくい。住みにくさが高じると

心安い處へ引越したくなる。何處へ越しても住みにくいと思つ

た時、詩が生れ、畫が出来る。

越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい處をどれ程

か寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝ

に詩人といふ天職が出来、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆ

る藝術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に貴い。

心理三分説
智の利新スルカ
情

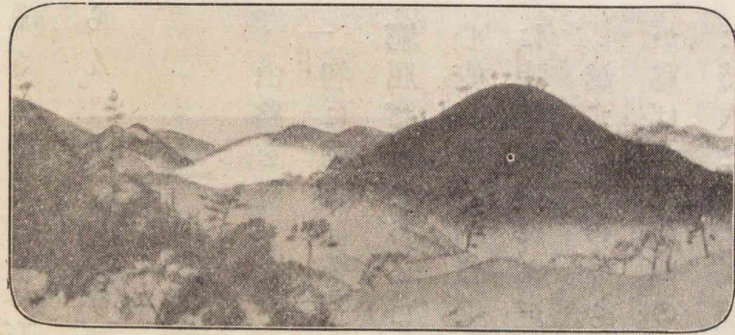
意

人類の世の

等閑

長閑

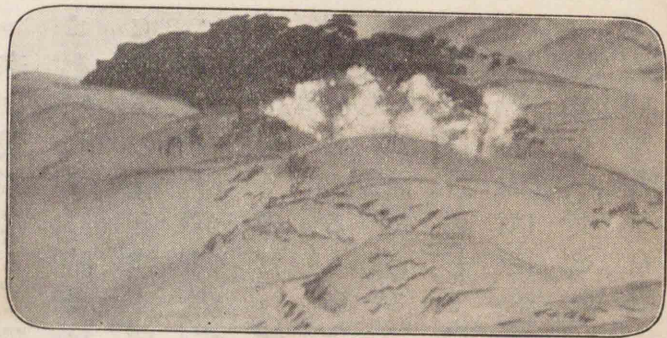
無聲の詩
無色の畫
無絃の琴



(一) 草 枕 繪 卷

住みにくい世から住みにくい煩ひを引抜いて、有難い世界をまのあたりに寫すのが詩である。畫である、或は音樂彫刻である。細かにいへば、寫さないでも、たゞまのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。着想を紙に落さずとも、鏗鏘の音は胸裏に起り、丹青を畫架に向つて塗抹せずとも、五彩の絢爛は自ら眼に映る。たゞおのが住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清くうらかに收め得れば足りる。此の故に、無聲の詩人には一句無く、無色の畫家には尺練無くとも、かく人生を觀じ得る點に於て、かく煩惱を解脱し得る點に於て、かく清淨界

殺・殺
刺・刺
潑・潑



(二) 草 枕 繪 卷

に出入し得る點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩し得る點に於て、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。忽ち足下で雲雀の聲がし出した。谷を見おろしたが、何處で鳴いてゐるか影も形も見えぬ。たゞ聲だけが明かに聞える。せつせせせはしなく鳴いてゐる。方幾里の空氣が、一面に蚤に刺されて、あたゝまれないやうな氣がする。あの鳥の鳴く音には、瞬時の餘裕も無い。長閑な春の日を鳴きつくし鳴きあかし、また鳴きくらさなければ、氣が濟まぬと見える。其の上何處までも登つて行く。いつまでも登つて行く。雲雀はきつと雲の上で死ぬに相違ない。登

舉句
結句

り詰めた舉句は、流れて雲に入つて漂うて居る中に、形は消えて無くなつて、たゞ聲だけが空の裡に残るのかも知れない。

春は眠くなる。猫は鼠を捕ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて正體が無くなる。たゞ菜の花を遠く望んだ時に眼がさめる。雲雀の聲を聞いた時に魂の在所が判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのでは無い、魂全體で鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれたるものの中で、あれ程元氣のあるものは無い。あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。忽ちシェレーの詩を思出して、口の内で覺えた所だけ誦して見たが、覺えてゐる所は二三句しか無かつた。

「前を見ては、後へを見ては、物欲しと憧るゝかな、われ。」

腹からの笑さいへど、苦しみは、そこにあるべし。

美しき極みの歌に、悲しさの極みの想ひ、籠るゝぞ知る。」

シェレー
英國の抒情詩人
(西曆一七三二—一八二二)
前を見ては
雲雀に寄する賦

萬斛の愁
は行くまい。

畫幅
詩卷

陶冶
薰陶

なる程いくら詩人が幸福でも、あの雲雀のやうに思ひ切つて、前後を忘却して、一心不亂に我が喜を歌ふわけには行くまい。

西洋の詩は無論のこと、支那の詩にもよく萬斛の愁などといふ辭がある。詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く積りになれば、微塵の苦も無い。菜の花を見ても、たゞ嬉しくて胸が躍るばかりだ。かく山の中へ来て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで別段の苦しみも起らぬ。

苦しみの無いのは何故であらう。たゞ此の景物を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貫つて開拓する氣にもならねば、鐵道を架けて一儲する料簡も起らぬ。たゞ此の腹の足しにもならぬ景色が、景色としてのみ余が心を樂しませるから、苦勞も心配も伴はぬのであらう。

自然の力はこゝに於てか尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇

塵界
俗界
穢土

仙人
霞を散り霧を食ふ

採菊云々
晋の陶淵明の
南山
終南山の略、
陝西省にあり。

乎純粋ナリとして醇なる詩興に入らしめるのは自然である。

苦しんだり怒つたり泣いたりするのは、人の世のつき者だ。余の欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞する様なものではない。俗念を放棄して、少時でも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居は無い。理非を絶した小説は少からう。何處までも世間を出ることの出来ぬのが其の特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、いはゆる詩歌の純粹なものも此の境を解脱することを知らぬ。嬉しいことに、東洋の詩歌にはそこを解脱したものがあつた。

採菊東籬下。悠然見南山。

唯それぎりの裏に、暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出て来る。垣の向ふに隣の人が覗いてる譯でもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と出世間的に、利害損得の汗



——（筆業廣崎寺） 維 王 ——

獨坐云々
唐の王維の
詩。

別乾坤
別天地

出世間
超世間

下ルストイ
ニケ
祝(近世思想)
優位(編)

を流し去つた心持になれる。

獨坐幽篁裏。

彈琴復長嘯。

深林人不知。

明月來相照。

只二十字の内に、優に別乾坤を建立して居る。此の乾坤の功德は近世の小説などの功德ではない。汽船・汽車・權利・義務・道德・禮儀で疲れ果てた後、凡てを忘却して、ぐつぐつと寝込む様な功德である。二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀に此の出世間的の詩味は大切である。惜しい事に、今の詩を作る人も詩を読む人も、みんな西洋人にかぶれて居るから、わざと「香氣な扁舟を浮べて、此の桃源に溯る者はないやうだ。」

余は固より詩人を職業にして居らんから、王維や淵明の境界を今の世に布教して廣げよう云ふ心掛も何もない。只自分には、かういふ感興が、演藝會よりも、舞踏會よりも、藥になる様に思はれ

フアウスト
獨の大文學者
ゲーテの作
ハムレット
英の大文學者
シェクスピア
の作。

不人情
人情
目三ノ起
目三ノ起
目三ノ起

る。フアウストよりも、ハムレットよりも有難く考へられる。自分
分がたゞ一人、繪の具箱と三脚几を擔いで、春の山路をのそ／＼
歩くのも、全く之がためである。淵明・王維の詩境を直接に自然か
ら吸収して、少しの間でも、非人情の天地に逍遙したいからの願ひ
一つの醉興である。(漱石全集)

「草枕は可なり修飾された文章である。といつて、それは先生が「草枕」
に骨を折つて、推敲百番、遅々として漸く書き上げられたといふ意味で
はない。筆を呵すること僅かに一七日、一氣に出来上つたものだとい
ふことは私共も聞いて居る。聞いて居るばかりでなく、それがまた行
文の上にも表はれて居る。あれだけ絢爛な、獨創と感覺的幻惑とに富
んだ、目の覺めるやうな綺麗な文章でありながら、何處にも筆の滯滞し
たやうな痕跡は見えない。泉の湧くが如く、奔湍の巖に激して流るゝ
が如く、矢も盾もたまらず書き下してある。そこが人を驚かせる、人の

エレメント
Element

目を眩惑させる。最初この作を一讀した時、私は「言語に絶す」とばかり
感慨これを久しうしたものだ。つまり斯ういふ文體なり材料なりが
先生のエレメントにあつたのである。斯ういふ人事自然の觀方なり
趣味なりを俳句の修業で養つた上、一方には外國文學の研鑽から來た
該博な知識で洗煉し、漢學の素養から來た豊富な文字の蘊蓄がそれを
扶けて、何がなしに腹一杯溜つて居たものを一時に吐き出されたかの
觀がある。その結果「草枕」に見るが如き壯觀を呈したのは無理もなし。
處で、先生といふ人は、最初は俳句に安住の地を求めた人である。そ
れが俳句では満足が出来なくなつて、追々創作に手を延ばすやうにな
られてからも、やはり俳句で養はれた藝術觀なり趣味なりが、その根柢
をなして居た。所謂俳味なるものゝ中で、物の不調和を味はふ方面、即
ち一轉して滑稽味となり、滑稽味に參することによつて解脱を期する
方面では、先づ「自轉車日記」などに萌芽を發して、吾輩は猫であるに大成
した。「坊ちゃん」は單なる滑稽物とは云はれないかも知れないが、先生
の作を大別すれば、先づ此の系統に屬するものと見て差支ない。これ

森田草平

名は米松、夏目漱石の門人、法政大學教授。

凡河内躬恆

醍醐天皇時代の歌人、古今集の撰者。

素性法師

俗名良岑、支利、僧正遍昭の子、歌僧。

に反して、俳句本來の面目を發揮して、物の調和を味はふ方面、即ち詩と美の世界に悠遊し、それに味到することによつて轉瞬の解脱を求めようとする方面では、先づ此の「草枕」を代表作として擧げなければならぬ。實際「草枕」は俳句を引き伸ばしたやうな作である。そして、先生のそれ迄の句作に於ける修養と蘊蓄とは、此の一篇に結晶して表はれて居ると云つてもよい。(文章道と漱石先生—森田草平)

四 梅の花

春の夜梅の花をよめる

春の夜のやみはあやなし梅の花

色こそ見えね香やはかくるゝ

凡河内躬恆

花ざかりに京を見やりてよめる

見わたせば柳さくらをこきまぜて

素性法師

みやこぞ春のにしきなりける

郭公の鳴くを聞きてよめる

き

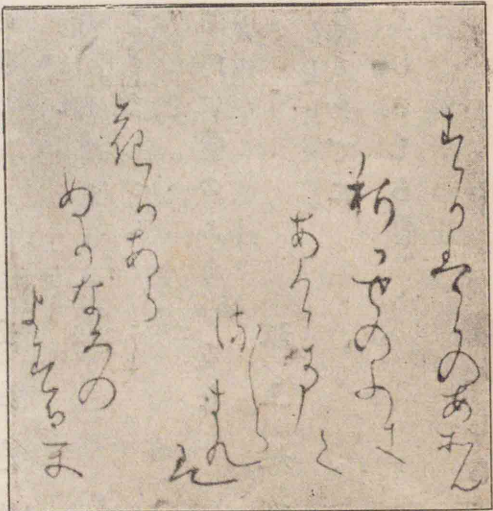
紀貫之

五月雨の空も

とゞろに時鳥

何をうしとか

夜たゞ鳴くらむ



紀貫之筆蹟

蓮の露を見てよめる

はちす葉のにごりにしまぬ心もて

なにかは露を玉とあざむく

僧正遍昭

紀貫之

醍醐天皇時代の文學者、古今集の撰者。

貫之筆蹟

すがはらのあそん秋かぜのふきあげにたてしらぎくは花みかあらぬかなみよするかな

僧正遍昭

俗名は良岑、貞。宇多天皇時代の歌僧。

壬生忠岑
醍醐天皇時代の歌人、古今集の撰者。

昨日こそ早苗とりしかいつの間に

讀人しらす

稲葉そよぎてあきかぜの吹く

是貞のみこの家の歌合の歌

壬生忠岑

山里は秋こそことにあびしけれ

鹿のなくねに目をさましつゝ

大和の國にまかれりける時に雪のふりけるを

見てよめる

坂上是則

朝ぼらけありあけの月と見るまでに

よし野のさとにふれるしら雪

題しらす

讀人しらす

わが君は千代に八千代にさゞれ石の

わが君は
和漢朗詠集には「君が代は」とあり。

坂上是則

平安朝の歌人、醍醐天皇時代の

小野篁
嵯峨天皇時代の漢學者、世に野相と稱せらる。

いはほとなりてこけのむすまで

隱岐の國に流されける時に船にのりて出立つ

小野 篁

とて京なる人につかはしける

わたの原八十島かけてこぎ出でぬと

人にはつげよあまのつりぶね

田村の御時に事にあたりて津の國の須磨といふ

處にこもりはべりける時に、宮のうちに侍りける

人につかはしける

在原行平

わくらははに問ふ人あらば須磨の浦に

もしほたれつゝわぶとこたへよ (古今和歌集)

やまこ歌は、人の心を種として、萬の言の葉とぞなれりける。

在原行平
阿保親王の子、業平の兄。

古今和歌集
醍醐天皇の時代、紀實之、紀友則、凡河内、仲恒、壬生、忠岑の四人、勅を奉じて撰したる和歌の集。二十卷。

世の中にある人、こゝろわざしげきものなれば、心に思ふ事を見るもの聞くものにつけていひ出せるなり。花になく驚、水にすむ蛙の聲をきけば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をもいれずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。(古今和歌集序—紀貫之)

五 國歌と國民性

田邊 尙雄

田邊尙雄
理學士、音樂
舞踊の研究者。

一國の音樂が、これ程その國民に左右せられるかといふことは、國歌などを見るに最も明かにわかる。實に、國歌の比較は、一面には國々の國體を比較することにもなり、またその國民の氣風性質などを知る便りともなる。今試みに、西洋音樂の中心をなしてゐ

る伊佛、獨三國について、其の國歌を較べて見よう。

最初先づフランスの國歌「マルセーユ曲」に就いて考へて見ると、これには貴族的好尚に對する反抗があらはれてゐて、甚だ平民的傾向を帯びて居る。従つて國歌の上に尊嚴といふものがない。そのかはり、感情は實に遺憾なく現れて居る。一體フランス音樂には、感情の極端なる發現といふところが一つの特徴となつて居るのであるが、此の國歌は實にその尤なるものであるといつてよい。此の意味に於て「マルセーユ曲」は、眞にフランス人民を代表する所の國歌として、ふさはしいものである。

次にドイツの國歌を見るに、之は全くフランスの反對である。

ドイツ國民は、頗る剽悍勇猛であると同時に、又理性的であつて、徒らに感情に走らない。従つて感情中心のフランス音樂などとは大いに違つて居る。此の國には古來愛國的歌謠が頗る多いが、そ

マルセーユ曲

「行け祖國の
子。光榮の日
ぞ來る。」
……
開け、暴兵は
野に叫び、抱
ける妻、居ら
んとす。武裝
せよ國民。進
め、汚血
は我が田染
んとす。」

特長
特徴

ラインの守

此の河の防禦者や誰安んぜよ愛する祖國。ラインの守は立てり且忠實に。ドイツ人の祖國云々

の愛國心といふのが、又、我が國やイギリス・ロシアなどと甚だ異つて居る。我が國は全然皇室中心主義であつて、愛國といふものは皇室を尊重することである。然るにドイツの愛國は、自國が他國に對して戰勝を得ることを喜ぶといふだけの思想から起つた愛國心である。従つて國歌は皇室尊崇などよりは、他國に對する威壓を以て第一の目的として居るのである。此の點がドイツ國歌の特徴である。それは準國歌たる「ラインの守」及び同じく準國歌たる「ドイツ人の祖國は何處か」を見ると、實に遺憾なく汎ゲルマン主義を叫んで居るのがわかる。斯様にドイツの國歌とフランスの國歌とを比較すると、ドイツのものが威壓的であるのに反して、フランスのものは反抗的である。ドイツのものが理性的であるのに反して、フランスのものは感情的である。實に此の兩國の國歌を見ただけで、歐洲大戰爭の光景が、目に見えるやうに感ぜられる。

バルチックの濱か否々々。我が國は更に大なるべし。

統一されて

イタリアは、小國數多分裂せしが、一八四八年、オーストリアの業を企て、一八六六年、遂に之を完成せり。

翻つてイタリアは、どうであるか。普通イタリアの國歌といへば、「ロイヤルマーチ、オヴ、イタリア」と稱せられる所の軍歌的の進行曲であつて、歌ではない。これは中々面白く愉快に出來ては居るが、尊嚴といふ感じは少い。餘り巧に作り過ぎてあつて、國民の眞情が流露して居ない。これは全く此の國の歴史に依るのである。イタリアが現今のやうに統一されて帝國となつたのは、今から僅か六十年程前である。茲に於て始めて國家的觀念といふものが急激に勃興して來て、愛國的歌謠が現はれて來た。國歌たる「ロイヤルマーチ」は此の時に生じたのである。ところが、それに國民の眞情が流露してゐないのは、元來永い間の精神修養によつて出來た愛國心ではなくて、歴史上の變動のために急に現はれて來たものだからである。それに、彼等は當時獨立戰爭のために全國民が一致した所の元氣が、即ち愛國心であること誤解してゐたやうで、國

家皇室の尊嚴といふことは、その中に入つて居ない。且またイタリーでは、從來音樂が頗る發達して、作曲法の技巧も進んで居たものだから、國歌が内容よりもむしろ形式に流れてしまつて、國歌と



林 廣 守

してはあまりに作曲法が上手過ぎてある、飾り過ぎてある。言ひ換へれば、あまりに音樂に對する知識が進み過ぎて居たといふ缺點がある。此の點から見て、日本の國歌はどうか。

「君が代」は宮内省雅樂部の林廣守氏の作曲で、比較的新しいものであるに拘らず、イタリーとは大いにその性質を異にして居て、非常に尊嚴なものである。今日我が國の國旗である旭日の意匠と、國歌である「君が代」の旋律とは、確かに世界に對して我が國の威嚴を

林 廣守
宮内省雅樂部
副長、音樂家、
明治二十九年
歿、年六十六。

示す標徴となつて居るといつてよい。

然らば如何にして我が國には斯様に尊嚴なる國歌が生ずるに至つたかといふに、その成立の動機が、根本に於てイタリーと全く相異なるからである。「君が代」の作曲は一度外國人が手を着けたけれども、不成功に終つた。その後、林廣守氏が、全然古代の雅樂に則つて作られたのが現今の「君が代」である。我が國歌が、かゝる宮中の雅樂師、而もその老輩の手になつたといふのは一寸異様であるが、實はそれが我が國の大幸福であつたのである。

一體我が國上代の音樂は、眞の大和民族の眞情を流露した音樂である。ところが奈良朝から平安朝の初期へ掛けて、支那大陸の形式的音樂、所謂舞樂が輸入されて、爾來その盛なるにつれて、大和民族本來の性情を具備した音樂は閉息してしまつて居た。然るに平安朝の中頃から支那が亂れて、従つて我が國から留學生など

閉息
屏息

久米舞
雅樂の一種、
神武天皇の兄
磐石御子の給ひ
しめ給ひし舞を
久米部に給ひし
の。

をも送ることが出来なくなつたので、輸入音楽も勢力を失つてしまひ、そこで始めて支那大陸輸入の音楽と、大和民族本来の音楽との調和が行はるゝに至つた。斯くの如くして、終に形式の整つた日本音楽といふものになつたのである。元來古代に於ける大和民族本来の音楽は、大陸的性質を備へて居たもので、決して島國的ではない。かの神武天皇御作の「久米舞」などは、如何にも雄大にして且莊嚴なもので、これを宮中の饗宴に於て拜する外國の使臣は、皆その結構の偉なるに驚嘆するといふ。斯様に、大和民族本来の特性を失はずに、それに最もふさはしい形式の與へられた音楽が所謂雅樂である。さうして之を大體保留して傳へて居た宮中の雅樂師が、君が代を作曲したのであるから、それが大和民族本来の性情を備へて居て、而も形式に於て可なり立派なものであるといふのは當然のことである。是に於て、我が國の國歌とイタリーの

國歌と、その成立を全然異にしてゐることも、又従つてその性質の上にも多大の相違を生じた理由も、明かに知られるであらう。

(音樂通論)

六十訓抄

一 心 操

すべて人の振舞は、おもらかに言葉すくなにて、人をものな
らさず、人にもならされず、戲を好まず、おこなしくさしふる
まひて居たれば、心の中は知らず、よきものかなと見えて、人
にも恥ぢられ、ごころをもおかるゝなり。かゝれども、これ
はなつかしく思はしき方にはあらず。たゞみだるべき所
にはみだれ、折にしたがひては戲をもし、をかしき事をも笑

十訓抄
三卷。和漢古
今の教訓的説古
話二百五十餘
條を十篇に分
類し各篇首に
序言を掲ぐ。作
鎌倉時代の著
者なれど、著者
明かならず。

をかし

僑驕

ひ、人のなごりをも惜しみ、友にしたがふ心ありて、わりなく思はれぬるは徳多かり。（可定心操振舞事）

二 僑慢

人の世にあるならひ、僑慢を先として、よく穩便なるは少し。或は、自由の方にて穩かならず。これは、わが涯分を料らず、さしもなき身を高くおもひあげて、主をも輕しめ、傍輩をもさぐるなり。或は、偏執の方にてかたくななり。これは、わが思ひたることをいみじうして、人のいふことを用ひざるなり。或は、世にかはれる振舞あり。これは、昔をのみいみじと思ひて、今の世にしたがはぬなり。或は、折節に似ぬをこあり。これは、内々よくなれにしかばと思ひて、はれ

をこ

うるはしう

つひに

たとひ

ある經に
願作心師不
樂經

に出でて人をならしめしは、うちこけ遊ぶ所に交りて、われは未だ亂れぬまゝに、こころはしう紐さしかためて人をしらかし、その座をさますなり。
おほかた、かやうのことは、僑慢をもこして、心の小さきより起れり。これによりて、つひに生涯をうしなひ後悔を深うす。かゝれば、たとひ身をよしと安んじ、昔をいみじしのび、物をおもしろしと思ふことも、人目をはかり世のそしりをつゝしみて、心に心をまかすまじきなり。されば、ある經には、「心の師とはなることも、心を師とせざれ。」と説かれたりとかや。凡そ貧しき者の諂はざるはあれども、富める者の驕らざるはかたければ、皆人の習なれども、身のいたりて

しづまる

徳の重からんにつけても、よくしづまりて穩かなるおもひをさきこすべし。(可離_ニ僑慢_ニ事)

三人倫

人をあなづることは、しなかはれども必ずあることなり。或は、貧しく賤しきをもあなづり、或は、不覺なるをもあなづり、或は、われよりさがれるをもあなづりて、することをもいふことをも、さばかりにこそ思へり。或は、親しみむつるを侮づり、おほかた、不運なるものをば、行ふ所のことがらよからぬやうに思ひ、いやしきものは、ふるまひごふるまふこと、いたづらごとと思へり。これは無智の人のあることなり。これによりて、いふまじき言をもいひ、すまじき業を

ふるまひと
ふるまふ

も振舞ふほどに、侮るからにたはぶれして、想はざる外の恥がましきことにもあひ、厭はるまじき者にも厭はれぬれば、人に軽く思ひけたれ、心劣りせらるゝなり。(不可侮_ニ人倫_ニ事)

四 多言

人は慮なく、言ふまじき事を口ごとく言ひ出し、人の短をそしり、じたる事を難じ、かくす事を顯し、はちがましき事をたす。これらはすべてあるまじきわざなり。われは何こなく言ひ散らして思ひもいれぬ程に、言はるゝ人は思ひつめて、憤深くなりぬれば、はからざるに恥をも與へられ身の果つる程の大事にも及ぶなり。笑の中の劔はさらでだにも恐るべきものぞかし。又よくも心得ぬ事をあしざまに

はちがまし

笑の中の劔
唐書李義府傳
に「凡_ニ忤_ニ意_ニ者_ニ皆_ニ中_ニ傷_ニ之_ニ時_ニ號_ニ中_ニ義_ニ府_ニ笑_ニ中_ニ刀_ニとあり

な……そ

難じつれば、却りて身の不覺あらはるゝものなり。大方口
輕きものになりぬれば、某にその事なきかせそ。彼の者に
な見せそなど云ひて、人に心をおかれ隔てらるゝ、口惜しか
るべし。又人のつゝ、む事のおのづから洩れ聞えたるにつけ
ても、かれ話されしなど疑はれんは面目なかるべし。

(可誠三人上多言等事)

五 思 慮

人々より合ひてさるべき遊などせんには、たごひ身にこ
りて安からずくちをしき事に遭ひたりとも、かまへて其の
日のさはりあらせじと計らふべきなり。「その人のありて
しかるゝの折の事さめにき」と言はるゝ、口惜しき事なり。

くちをし

さず

しかれば行かぬ先より計らひ、悪しかるべき所へはさし出
でぬには如かじ。もし悪しく計らひて交り居なん後は、お
ぼろげならぬ身のいたづらになりぬべき程のきずなるべ
くば、事なきさまに言ひなしたはぶれにもてなして、おこな
しかるべきなり。況や我が使はん人のあやしからんため
に、今せがみさいなむ事いごみぐるしかるべし。

(可專思慮事)

七 俚 諺 論

大 西 祝

一 國民の言ひなれたる俚諺の内容を深く研究すれば、其
の國民の歴史氣質・風俗・人情・學術・宗教・社會制度等、其の一切
の生活と其の生活の理想とに就いて發見する所多々ある

大西祝
操山と號す、
岡山の文人、
學者、文學者、
明治三十三年
十二月十六日



大 西 祝

べし。「花は櫻木、人は武士。」こ
大 いふ美しき諺は言ふも更な
西 り、武士は食はねど高楊枝。
祝 「武士は相見互。」こいふが如き
は、我が國の歴史に大光彩を

女に家なし
婦人有三從
之義無專一
之道故未嫁
從父既嫁從
夫

放てる武士こいふ階級の理想を窺ふに足るべく、又之によ
りて、かゝる理想を愛重したりし全國民の氣風を察し得べ
し。「泣く子と地頭には勝たれぬ。」こいふを見れば、千萬言の歴
史的敘述に劣らず、我が國の歴史の或時代に於ける地頭こ
いふ者の勢力の如何なりしかを察知し得べく、女に家なし。
「貞女は兩夫に見えず。」こいふなどは、我が國に固有なる諺こ

夫、夫死從
長子。(儀禮)
貞女は
忠臣不事二
君、貞婦不
更二夫。(史
記)

崇崇

はいふべからざれども、亦以て婦女子に關する我が社會制
度の一面を窺ふに足るべく、嫁が姑になる。「老いては子に従
へ。」こいへば、我が國の家族制度を示す所あり。「さはらぬ神
に崇なし。」棄てる神あれば助ける神あり。「神は正直の頭に
やどる。」苦しい時の神だのみ。などは、宗教思想を示すべく、袖
ふり合ふも他生の縁。「こいへば、以て佛教によりて注入せら
れたる因果思想を見るに足るべし。

歐洲諸國の諺には、夫婦の關係をいへるもの甚だ多く、我
が國にては、寧ろ親子の關係をいへるもの多きが如し。「親
の心、子知らず。」子を知るもの親に若くはなし。「子ゆるゑの闇
に迷ふ。」孝行をしたい時分に親はなし。「可愛い子には旅を

伽伽

させよ。「子は三界の首枷。」子が思ふよりは、親は百倍も思ふ。「こいふなど、親の慈をいふや至れり盡せり。その上に「子よりも孫は可愛い。」こいへる、何の言かこれにまさりて孫の愛の濃かなることを發表するものぞ。かく親の慈愛を稱ふるものから、俚諺はまた能く人情の他面をいふ。「子を棄つる藪はあれど、身を棄つる藪なし。」こは、よくも吾人の主我心を言ひ穿てるものと謂ふべし。

一般の人情に自利の念ほど強きはなかるべし。俚諺の如何に多くが損得の念を主とせるものなるかを見よ。而して其の中に、如何によく普通の人情を穿てるものあるかを見よ。「下さるものは夏も御小袖。」かたきの家にて口を

聖人は
子曰、知之爲
知、不知、不知
爲不知、不知
知也。(論語)

氣概
節概

ぬらせ。「ころんでも唯は起きぬ。」泣く子も目を見る。「まことに然り、泣く子すら自身を護るには油断せざるなり。「油断大敵。」小を棄てて大に就け。「長いものには巻かれよ。」曲らねば世に立たれず。」など、いつれか利益の念を主とせざる。聖人は「知らざるを知らずとせよ。」こいひ、俚諺は「知つて知らざれ。」こいふ。「鷹は死すとも穂をつまず。」など氣概を稱揚するもあれど、俚諺の大體の教訓は、「賢かれ、損をすな。」こいふにあり。

俚諺は事の一面を見てこれを誇張して言ふ傾あるものから、其の他面をいふに躊躇せざるが故に、一見其の判断の相反するがごとく思はるゝものあれど、かく兩面よりいふ

所よく世態人情の實相にかなひて、其の判断概ね公平なり。「すきこそ物の上手なれ。」といへど、下手の横すき。「いふを忘れず。親に似ぬは鬼子。」といへば、「形生めども心は生まず。」といふ。かく事の両面を叩いて世相の内秘、人情の裏面を穿たんと力むる、これ即ち俚諺が警戒と諷刺とに富める所以にして、中には一言よく人情の裏面を託きて、巧に罵倒し了するものあり。

我が國の俚諺は、他國の俚諺に比して其の性質及び價値如何。これらの問題を考ふる前には、まづ我が國の俚諺を採集せざるべからず。予輩は早く適當なる準備を具へたる人が、此の事に手を着けんことを切望せざるを得ず。

(大西博士全集)

船頭多くして船山に上る。手柄立せんより下知に違ふな。
たつ鳥跡を濁さず。雨降つて地固まる。をかめ八目。
佛造つて魂入れず。難波の蘆は伊勢の濱萩。

八千貫目

井原西鶴

室町菱屋長左衛門殿借家に居申され候藤市と申す人、慥かに千貫目御座候。廣き世界にならびなき分限我なりと自慢申せし。仔細は二間口の棚借にて千貫目持都の沙汰になりしに、烏丸通に三十八貫目の家質を取りしが、利銀つもりておのづから流れ、始めて家持となり、是を悔みぬ。今までは借屋に居ての分限といはれしに、向後家有るからは京の歴々の内藏の塵埃ぞかし。此の藤市利發にして、一代のうちに斯く手前富貴になりぬ。第

八千貫目

四七

元禄時代
芭蕉
近松川左
井原西鶴

井原西鶴
元禄時代の小説作者、元禄六年(約二三年)歿、年五十二。
室町
京都市烏丸通の西通り。
烏丸通
今の京都驛の前を北に通ずる通。

利發
恰悞

雪沓



井原西鶴

一、人間堅固なるが身を過ぐる本なり。此の男家業の外に反故の帳をくゝり置きて見世をはなれず。一日筆を握り兩替の手代通れば錢小判の相場を附置き、米問屋の賣買を聞合せ、生薬屋、呉服屋の若い者に長崎の様子を尋ね、繰綿、鹽酒は江戸棚の状日を見合せ、毎日萬事を記し置けば、紛れし事は爰に尋ね、洛中の重寶になりける。

不斷の身持、肌、單襦袢、大布子綿、三百目入れてひこつより外に着ることなし。袖覆輪といふこと、此の人取りはじめて、當世の風俗見よげに始末になりぬ。革足袋に雪沓をはきて、終に大道を走りありきし事なし。一生の内に絹物と

鳥部山
京都市の東、
古來の火葬場。

大佛
京都市方廣寺の

ては海松茶染にせし紬一つ。若い時の無分別と、二十年も是を悔しく思ひぬ。紋所を定めず、土用干にも疊の上には置かず、麻袴に鬼縑の肩衣、幾年か折目正しく取置かれける。

町並に出づる葬禮には、是非なく鳥部山に送りて、人より跡に歸りざまに、六波羅の野道にて丁稚もろとも當藥を引いて、是を蔭干にして、腹藥なるぞと、たゞは通らず、躓く處で燧石を拾ひて袂に入れける。朝夕の煙を立つる世帯持はよろづ斯様に氣を附けずしては有るべからず。

此の男、生れついて吝きにあらず。萬事の取廻し、人の鏡にもなりぬべき願、かほどの身代まで年こる宿に餅搗かず。忙しき時の人遣ひ、諸道具の取置もやかましきこと、是も利勘にて大佛の前へ逃へ、一貫目に付何程と極めける。十二月廿八日の曙、いそぎ荷ひつれ、藤屋見世にならば「請取り給へ」といふ。餅は搗きたての好も

十露盤
算盤

しく春めきて見えける。旦那はきかぬ顔して、十露盤置きしに、餅屋は時分柄にひまを惜み、幾度か斷りて、才覺らしき若い者、ちきの目りんと請取りてかへしぬ。一時ばかり過ぎて、今の餅屋請取つたか。といへば、はや渡して歸りぬ。此の家に奉公する程にもなき者ぞ。温もりのさめぬを請取りし事よ。と、又目を懸けしに、思の外に減のたつこと、手代我を折つて、喰ひもせぬ餅に口をあきける。

東寺

京都の南端九條に在り。

其の年明けて、夏になり、東寺あたりの里人、茄子の初生を目籠に入れて賣り來るを、七十五日の齡、これ樂みの一つは二文、二つは三文に直段を定め、何れか二つ取らぬ仁はなし。藤市は一つを二文に買ひていへるは、今一文で、盛なる時は大きなるが有り。と心を附くる程のことあしからず。

屋敷の空地に柳、柊、櫻、葉桃の木、花菖蒲、薺、苡仁など取りまぜて植置きしは、一人ある娘が爲ぞかし。葭垣に自然と朝顔のはひか、

源氏

源氏物語、紫式部の著。平安朝の代表文學。五十四帖。

伊勢物語

在原業平一生の行事の潤色したる物語。歌を主とす。二卷。

多田の銀山

攝津國河邊郡多田村なる鐵山、伊丹の北二里餘。

露地
路次

りしを、同じ眺めにははかなき物とて、刀豆に植ゑかへける。何より我が子を見る程面白きはなし。娘大人しくなりて頓て嫁入屏風を拵へごらせけるに、洛中盡を見たらば、見ぬ處を歩きたがるべし。源氏伊勢物語は心のいたづらになりぬべきものなりと、多田の銀山出盛りし有様書かせける。此の心からは、いろは歌を作りて誦ませ、女寺へも遣らずして筆の道を教へ、ゑひもせず、京のかしこ娘となしぬ。

親の世智なる事を見習ひ、八歳より墨に袂をよごさず。節句の雛遊をやめ、盆に踊らず。毎月髪かしらも自ら梳きて身の取廻し人手にかゝらず。いづれ女の子は遊ばすまじきものなり。

折節は正月七日の夜、近所の男子を藤市方へ長者になるやうの指南を頼むとて遣はしける。座敷に燈かゝやかせ、娘を附け置き、露地の戸の鳴る時しらせと申し置きしに、此の娘しをらしくかし

こまり、燈心を一筋にして物申の聲する時、元のごとくにして勝手に入りける。三人の客座敷に着く時、臺所に播鉢の音響き渡れば、客耳を悦ばせ、是を推して「皮鯨の吸物。」といへば、「いや、始めてなれば雑煮なるべし。」といふ。又一人はよく考へて「煮麵」と落着きける。必ずいふ事にしてをかし。

藤市出でて三人に世渡の大事を物語して聞かせける。一人申せしは「今日の七草」といふいはれは如何なる事ぞ。」尋ねける。「あれは神代の始末はじめ、増水」といふことを知らせ給ふ。」又一人「掛鯛を六月まで荒神の前に置きけるは。」尋ぬ。「あれは朝夕に肴を食はずに、是を見て食うた心せよ」と云ふ事なり。又太箸をこる由來を問ひける。「あれは穢れし時、白げて一膳にて一年中ある様に、是も神代の二柱を表すなり。よく、萬事に氣を附け給へ。借、宵から今まで各、話し給へば、最早夜食の出づべき處なり。出さぬが

増水
雑炊

長者になる心なり。最前の播鉢の音は大福帳の上紙に引く糊を播らした。といはれし。(日本永代藏)

西鶴の文章は何人も企及し難い長所を有つてゐる。その簡潔で奇警なことは、前後絶えて比類がない。若し國文學史に類似を求めるならば、たゞ清少納言の枕草子が、やゝ之に近いであらうか。それすら西鶴ほどには警句に富んでゐない。斯くの如き文章が、西鶴以前の徒らに平易流暢な調子を尙んでゐた假名草子の後に顯れたのは、實に異様にさへ感ぜられる。これは勿論西鶴その人の天稟の才でもあるが、又俳諧から來た修業に負ふ所が多いのである。西鶴の文は一種の俳文と見て差支ないと思ふ。(西鶴の文章―佐々醒雪)

九 人生は戦である

和辻哲郎

人生は戦である。そして戦の大小深淺が人間の價値を左右す

九 人生は戦である

五三

和辻哲郎
兵庫縣の人、
哲學者、京都
帝國大學助教

佐々醒雪
名は政一、京
都の人、文學
博士、大正六
年歿、年四十
六

人生の戦い
白刃の戦
人との戦
精神肉の戦

テーマ

古く五世紀

近頃は

トルストイ

トルストイ十三歳
トルストイの遺稿

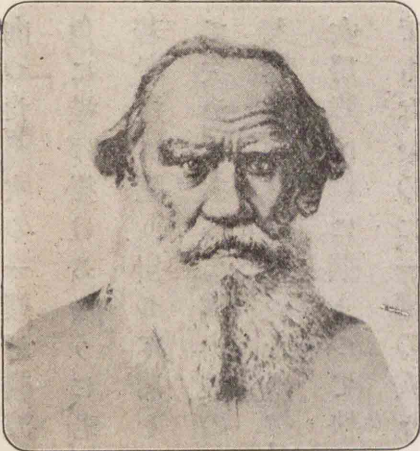
る。
戦の態度の統一は複雑な内生によるよりも、単純な迷のない生活に遙に起り易い。それ故、たゞ統一の故を以て意を安めてはならぬ。統一の態度に固執する者は、ごもすれば、内容を空疎にする。私は或冬の日、紺青鮮かな海の邊に立つた。帆を張つた二三十艘の小舟が羣をなして沖から歸つて来る。そして鳩が地へ舞ひ下りるやうに、徐々に一艘づつ帆をおろして、半町程の沖に屯した。濱邊との間には大きい白い磯波が捲きかへしてゐる。何時の間にか老人や子供達が濱邊に羣がり立つた。やがて、體格の立派な若者の揃つて乗つた舟が、沖合から突き進んで来る。磯波は烈しく押し戻す。磯から綱が投げられる。若者が波の間へ飛びこんで行く。舟は木の葉のやうに揉まれてゐる。綱が確實に舟に結びつけられる。若者は舟の傍木へ肩を掛ける。陸からは、綱を引

くものが諸聲に力のリズムを響かせる。かくて波を蹴散らし、足を揃へ、聲を合せて、舟を砂の上に引きずり上げて行く。

一艘あがるごにも、舟にゐた若者達は、直ちに綱を取つて海に向つた。次の一艘が磯波に乗りかゝるご、ちやうど暴れ廻る鹿の角に投げ掛けるやうに、若者は舟へ綱を投げ掛ける。そして他の若者達は躍り掛つて、肩をあてて一氣に舟を引きあげる。かうして次から次へご數十艘の舟が陸へ上げられるのである。陸上の人数は益々殖える。舟は益々面白さうに上つて来る。老人や子供や女房達は綱に掴まつて快活に跳ねてゐる。誰が命令するご云ふでもないのに、一團の人々は、有機體のやうに協力ご分業ごで仕事を完全に實現して行く。

私は息を詰めてこの光景を見守つた。海の方ご戦ふ人間の姿。集中ご純一ごが最も具體的な形に現れてゐる。力の充實、隙間の

ない活動。一人の少年が両手を高く舉げて波の中に躍り込んで行く。首だけ出して波にさらはれた板切に追ひ縋る。やがて板切を抱いて水を跳ねこぼしながら駛せ上つて来る。生命が躍り



跳ねてゐる。生命が自然と戦ひ、それを征服してゐる。私は、そこに現れた集中と純一と全存在的な活動の故に、暫し恍惚とした。この氣持の好きは、吾々が凡ての活動に追求して居る所の一種の法悦であつた。吾々の内にも亦、生の姿であり、また生本來の歡喜である。かうして漁師の羣の活動を眺めてゐる間に、私はふと傍觀者の

ecstasy
（字初より喜）
神と神の合致
（喜）
（喜）
（喜）

親と美人
親下馬

トルストイ
露西亞の文豪、思想家。
西曆一九一〇年歿、年八十
三。
考へる人
佛蘭西の彫刻家
ロダンの作



考へる人

手持無沙汰を感じ出した。私は漁師の羣に投じて共に働くか、でなければ傍觀者としての自己の立場を是認するか、いづれかに道を決めなければならなくなつた。さうして私の頭には百姓と共に枯草を刈るトルストイの面影と、地獄の扉を見下して坐してゐる、考へる人の姿とが、相並んで浮び出た。私は石の上に腰をおろし、足を重ねて、右の腕を左の膝に突いて、顎を手の甲にのせて、そして考へに沈んだ。残つた舟はもう二三艘になつてゐた。

私は思つた。漁師の羣に貴い集中と純一とを認めしたのは、私の

九 人生は戦である

心に過ぎなかつたではないか。彼等は濱から家へ歸る。そこにはもう貴さは見えない。彼等は波と戦つて勇しく打克つ。しかし敵手が人間になり、更に自分の心になる。彼等はもう立派な戦士ではない。彼等の活動は真正の面影を暗示するが、それは彼等自身の全生活ではなかつた。彼等は低い力と戦つてゐる時にのみ強いのであつた。

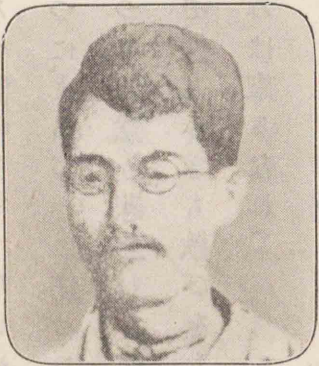
私は複雑な、深さの知れぬ人生の色々な力を思つた。そして集中と純一との缺けてゐる悲惨な醜さを心に浮べた。そこにある苦しい戦は、裸になつて冬の海に飛びこむ事によつては解決されさうにもなかつた。私はたゞ自分自身の力で、自分の内生にある集中と純一を獲得する外はない。そのために私はあらゆる方面に終局まで戦はなくてはならぬ。勝利を得るまでの分裂した生活のみじめさは、目下の自分の力では如何ともし難い。

私は一つの事を悟り得た。迷と屈託とに遅滞してゐるの故を以て、直ちにその人の人格を卑しめてはならぬ。態度の純一の故に直ちにその人の人格を過大視してはならぬ。態度の美しさの外に、なほ一つ、戦の深さによつて人を視る視點があるからである。
(偶像再興)

一〇 山庵雜記

北村透谷

北村透谷
名は門太郎、
文學者、明治
二十七年、
年二十七、
七



夢見まほしやと思ふ時、あやにくに夢のなき事あり。夢なかれと思ふ時、うごましき夢のもつれ入ることあり。寤むる時また斯くの如し。意はざらんと思ふに意ひ、意はんと思ふに意はず。さりさて意の如くならぬをば、意の如くせましと思ふにもあらず。靜かに傾き盡きなんとする月を見れば、よ

塵 起り多界 親念界 人の 天界

寤寐 夢寐

肉 自念界 現念界 人の 也と云

ろづ意のまゝにならぬものぞなき。徐ろに咲き出づらん花を待つに、よろづ心に任せぬものぞなき。如意却つて不如意、不如意却つて如意。悲しむも何かせん、歡ぶも何かせん。「無心」を備ひ來つて、悲しみをも歡びをも同じ意界に放ちやりてこそ、まことの樂しみは來るなれ。

早曉臥床を出でて心は寤寐の間に醒め、意は無意の際にある時、一鳥の聲を聽けば、忽としてわれ天涯に遊び、忽としてわれ塵界に落つるの感あり。我に返りて後その聲を味へば、凡常の野雀のみ。然るも我が得たる幽趣は地に就けるものならず。こゝに於いて私かに思ふ、感應、我を主として他を主とせざることを。

人間の心中に大文章あり、筆を把り机に對する時に於いてより

馬代院足狀

馬代三綱

右馬代くすかこさぬか

こりやどうちやくすと云ふ

るらうれいししとさぬと

云うはあかやんしおれや云

云つたは只

沙翁

セーケスビヤ。英國の戯曲作家。西曆一六六一年五月十三日歿。

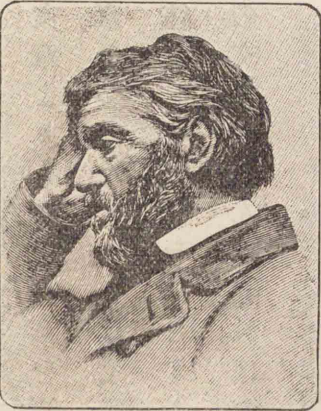
も、靜默瞑坐する時に於いて燦爛たる光明あること多し。心中の文章より心外の文章を綴るは善し。心外の文章を以て心中の文章を装はんとするは文字の賊なるべし。古より卓犖不羈の士、往往にして文章を事とするを喜ばず。文字の賊とならんより、心中の文章に甘んじたればならん。

「龜く斫られたる石にも神の定めたる運あり。」とは沙翁の悟道なり。靜かに物象を觀ずれば、物として定運なきはあらず。誰か恨むべき神を知りそめたる。誰か啣つべき佛を識りそめたる。心を物外に抽かんとするは未だし。物内物外、何すれぞ悟達の別を畫かん。運命に默從し、神意に一任して、始めて眞悟の域に達せんか。

挺出
挺身

孤雲野鶴を見て別天地に逍遙するは詩人の至快なり。然れども苦海塵境を脱離して一身を挺出せんとする、人間の道にあらず。苦海塵境に清涼の氣を輸び入るゝにあらずば、詩人は一の天職を帯びざる放蕩漢にして終らんのみ。

他を議せんとする時、尤も多くおのれの非を悟る。この頃激する所ありて生來甚だ好まざる駁撃の文を草す。草し了りて靜かに内省するに、人を難ざるの筆は同じ



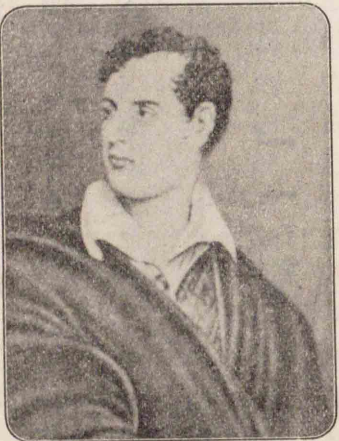
ルイラーカ

く己を難せんとするに似たり。是非曲直輕々しく判じ難し。如かず、修練鍛磨して明りに他人の非を測らざることを努めんには。

カーライル
英國の文學者、歴史家。
西曆一八八一年、
年八十七。

大いなる悔改はまた一箇の大信仰なり。「罪の罪たるを知らざるより大いなる罪はなし。」とはカーライルに聞くところなり。昨日の非を知りて明日の是を期するは信仰に入るの要諦なり。罪の重荷は忘れざるによつて忘るゝを得べし。忘れたる重荷はいつまでも重荷なり。悔改の生涯は即ち信仰の生涯なるか。

世にありがたき至寶は涙なるべし。涙なくては情もなからん、



バイロン
英國の詩人。
西曆一八二四年、
年三十七。

涙なくては誠もなからん。狂ひに狂ひしバイロンには、涙も細繩ほどの役にも立たざりしなるべけれど、世間おほかたのものを繋ぎ留むるは此の寶なるべし。情たがひ歡うすらぎたる間柄を緊め固むるもの、

涙の外には求めがたし。人世涙あるは、原頭に水あるが如し。世間もし涙を神聖に守るの技に長けたる人を擧げて主宰とするこゝとあらば、いたく悲しきことは跡を絶つに幾からんか。

(北村透谷集)

一一 藝術家

横山有策

横山有策
岡山縣の人、
文學者、早稲
田大學教授。

子供の部屋にはいつて見る。玩具が一杯に列べられ、家や庭や臺所や御馳走や、それからそれと連ね造られてある。子供等は外へ出て、今はどこに何を求めて居るか、そこには一人も居らぬ。只子供のなした仕事が残つてゐて、限なき愛らしさの匂ひが部屋の隅から隅にみなぎる。詩を読むものは直ちに詩人を想ふ。一個の假面には、假面師の涙とほゝゑみとがそこに讀まれて、層一層の感興が湧く。

内包
外包
劇
抒情詩
朱
空
行
周
老
莊
の
思
想
家
老
聃
と
莊
周
の
詩
の
杜
甫
の
詩

老莊
周代の思想
家。老聃と莊
周。
杜詩
唐の杜甫の
詩。

病的な健康な

我々凡人とても、おぼろげながら外界の印象を受ける。受けて多くは忘却する。よし忘却せず、やがてこれを何ものかに表現するにしても、その表現が拙劣若しくは微弱である。それを美しく、成功して表現するには、藝術家といふ特殊な人物を俟たねばならぬ。
藝術家は直観の稀な複雑した情態をいみじく表現し得る人でなくてはならぬ。その直観のうちには現在を捉む強い明かな力と、更に完全な世界を希求する理想のあこがれがなくてはならぬ。藝術家は完成を期するの人でなくてはならぬ。短歌一つ詠じ、童話一つものするにも、全身をこれに捧げて完成を期するのが藝術家の態度である。芭蕉翁が二十九歳、主家藤堂の家を出奔し、風流に身を委ねて東西に放浪し、禪を學び、老莊の學を修め、杜詩と親しみ、古歌に心をひそむること多年、世間からは新しい流派の棟梁

一 藝術家

六五

天竺の王子を以て
佛の王子を以て
佛の王子を以て

カーペンタ
英國の思想
家、西暦一八
七七年歿、年
七十一

こや、認められるに至つたが、自分では、いまだ一句も魂ありと思へる句を得ず。と嘆息した尊い心が藝術家の心である。自分の仕事を輕んじてはならぬ。何とかなるだらうではいかぬ。經驗を尊重し、過失を反復せず、鋭く觀察し、深く思念せねばならぬ。カーペンターが、自分の仕事に心から誇りと興味を感じ、その完全な仕上げをのみ念とし喜とする洗濯婆は、飯の種にと展覽會に出品する畫家より遙かに立派な藝術家である。といつたのは、又此の意に外ならぬ。

藝術家は至誠の人でなくてはならぬ。

「なほ深き奥もやあらん」と延寶九年のころより骨髓にとほりて、物みな心にをむくことなく、やゝ五とせを経て、貞享二年の春、まことの外に俳諧なしと思ひまうけしより、その飾りたる色品も、かの一句のたくみも、ことごとく失せて、それは、皆そらごととなりぬ。

延寶九年
靈元天皇の御
代、約二五〇
年前
貞享二年
同上(約二五
〇年前)

ぬ。
と伊丹の鬼貫が自白したは偉い。

又伊丹の鬼貫が自白したは偉い。

鬼貫
上島氏、俳人、
攝津伊丹の
人、元文四年
(約一九〇年
前)歿、年七十
八。
筆蹟
夕陽のすがすが
に寒し小六月
おにつら

自分に對し藝術に對して、誠ある人、赤裸々なる自己を表現し得る人でなくてはならぬ。名のために非ず、得のために非ず、將た他に立ち優らんとする競争慾にも非ず、わが内なるものを十二分に發揮することを以て唯一の願ひとする人でなくてはならぬ。人を詩人にするのは其の人の至誠と洞察の深さである。十分深く見よ、さすれば音樂的に見える。大自然の心情は、君がそれに達し、さへし得れば、到るところ音樂なのだから。とカーライルは言つてゐる。至誠は强者の印、不誠實こそ弱者の

画つたりであら

一言居士
カーライルの佛蘭西書論
は著者の心はなること
は著者の心はなること

ルン
エミール
ルン
セントアウグスチン

ルソンの作
 エミール
 モーリス
 トルストイの著
 トルストイの著
 ロシヤの思想家、小説家。西暦一九一〇年歿。年八十
 三
 佛國の評論家。キリストの生涯を著して「神の子」とする。西暦一九一〇年歿。年七十
 五
 五郎の著
 一兵
 増一
 一月

藝術家と雖も社會の一員たる責任を免れるわけには行かない。又彼等の言行不一致は決して彼等の誇でも又特權でもない。ただ他の長所のために聊かの缺點を大目に見るだけである。宗教は常に實行を要求する。實行なき宗教家はその生命を失つたものである。藝術家は觀感じ、而して表現することを生命として、必ずしも實行を要求しない。トルストイが愛と、労働とを人生の根本義と解し、みづから農民の間に交はつて實踐躬行した時、人は彼を崇めて宗教的藝術家といつた。人生最大の藝術は、最も崇高に生きることでなくてはならぬ。此の意味に於いて、我々はルナンと共にいふ、*人生最大の藝術は人生の實踐である。*

「世界最大の藝術家はキリストである。」

故に歸着するところ、藝術家と雖も一般人間に要求せられる言行を拒否するわけに行かない。殊に最近の傾向の、身を以て藝術を作らんとする方向に進みつゝ、あることは注目に値ひする。

(文學概論)

朝夕六時と日
 中の三度に
 鳴る鐘をい
 ふ。この時そ
 の日の祈禱を
 捧ぐ。
 エンジエラ
 ス

一日の業を了へたる若き農夫と其の妻と、今まさに家路に就かんとするとき、エンジエラスの祈禱を告ぐる夕べの鐘の音ひびきわたりぬ。二人は頭を垂れて無言のいのりを捧げぬ。

地には平和あり、天には光あり、人には愛情あり。而して天國の響に應ふる此のいのりだにあらば、吾等此の世に於て何の求むる所ぞや。あゝ、若き農夫と其の妻とが、今まさに無言のいのりを捧げつゝ、あるを見ずや。

あらゆる此の世の得失盛衰は、此の無言のいのりの前に何の意味ありや。名利に渴き、榮華に餓うる者よ、汝の短き日の



—— 晚 鐘 (レミ) 筆 ——

何時かは暮れん時、而してエンジエラスの祈禱の鐘の、汝の晩年に響かん時、汝はこゝに永世の望みをあふぎ、天國の光を求めむとも、其の心果して此の若き農夫の如く安きを得べしとするか。悠久なる自然は限りなき平和の中に、此の人生の憂悶を包みつゝ、日毎々々に改悔の聲を促せども、人は遂に聴くところ無し。危からずとせんや。

ミレーの此の圖は、まことに人生の永遠なる祝福を標示して餘情極りなし。愛あり、信ある者の手に取られたる鋤は、空閑にして虚榮を擁する王者の劔といづれぞや。これ此の圖

西畫	鐘	レミ	解題	牛	生
一	口	口	口	口	口
二	口	口	口	口	口
三	口	口	口	口	口
四	口	口	口	口	口
五	口	口	口	口	口
六	口	口	口	口	口
七	口	口	口	口	口
八	口	口	口	口	口
九	口	口	口	口	口
十	口	口	口	口	口

二元論
カントの言
我々の欲求は限界あり
更なる理性の厚み
諸君は有るべきものとした
カントの言
我々の欲求は限界あり
更なる理性の厚み
諸君は有るべきものとした

塗殺
抹殺

トストイ
入三ハ遊戯
非ナ

シエルブ
ル
佛國の海港。
英吉利海峡に
臨み、軍港と
商港とに分
る。

デラロツシ
ユ
佛國の畫家。
西曆一八五六
年歿、年六十。

の與ふる最も大なる教訓にして、最も美はしき詩趣なり。其
の人界一切の色相を塗殺せる暮靄一抹の場景を擇び、遙かに
寺塔の髣髴を描きて、晚鐘のひびきを點出せるが如き、殊に畫
題の秀でたるを見る。

ジャン・フランソア・ミレーの一生は、藝術の士の堪へ忍ぶべ
き殆どあらゆる困難の記録にして、殊に個性の開發に本づけ
る其の晩年の成功は、後進の技術家が永く龜鑑とすべきもの
なりき。千八百十四年四月、佛蘭西のシエルブールの近傍に
生まれ、二十歳過ぐる頃までは、彼の前途にはたゞ野に耕す者
の運命のみ望まれき。されど藝術の天才は夙に隴畝に現れ
しかば、其の土地の人の助けによりて巴里に赴き、時の名高き
畫家デラロツシユの畫堂に入りぬ。これ彼が二十四歳の時
なりき。されど流派になづみ傳承に安んずるは、彼の性に反

ける業なりしかば、巴里を去りてバルビゾンの田園に住まひ
 しまでは、彼の技能は甚だ望みあるものと許されざりき。見えなからバル
 ビゾンの生活は、彼に自然てふ新しき師を與へぬ。彼が天
 成の才器これより俄かに開發し、他の即接を許さざる彼の個
 性は、大空に舞ひかける鷺の如く、自由に其の翼を伸ばしぬ。
 「播種者」エンジエラスの如き不朽の大作は、いづれも此の時期
 に於て世に現れたり。かくて彼は一世の讚美の聲に包まれ
 つゝ、千八百七十五年、年六十二にして此の世を去りぬ。此の
 圖もと題して「エンジエラス」といふ。こゝに「晩鐘」と云へるは、
 其の意に近きに隨ひて、邦語の呼び易きを取れるのみ。所謂
 エンジエラスは、羅馬教會の一儀式にして、其の祈禱の破題に、
 「エンジエラス、ドミニ云々」とあるより此の名あり。此の祈禱
 は今は大かた廢れたれども、南歐の田舎には、まだ晩景の頃に

此の式を存するものありと云ふ。(晩鐘—高山樗牛)

高山樗牛
 名は林次郎、
 評論家、文學
 博士。明治三
 十五年歿、年
 三十二。

藤岡作太郎
 金澤の人、東
 洋學博士、文
 學博士。明治
 四十三年歿、
 年四十一。

瀉瀉

一一一 我が國の繪畫

藤岡作太郎

日本畫と西洋畫とは漸次混融して、其の區劃も明瞭なら
 ざるに至るが如しといへども、此の兩者の純粹なるものを
 比較すれば、各自の特色は尙甚だ顯著なり。管に絹紙と彩
 具との相違のみならんや。其の用意筆法等に於て皆然り。
 彼にあつては藝術は科學と並行し、理性は想像の銜となり
 て、遠近明暗つとめて自然に背かざらんことを期し、此にあ
 つては文化の精神的方面、獨りまづ進み、筆を揮ふもの感興
 に乗じて、腦裏の印象を瀉ぎ出す。彼は色彩を旨とし、此は

描線を重んじ、彼は實相の通りに空氣の色をも漏らすこと
なく、此は主體の外は生地の儘に存す。一は濃艶、一は瀟洒、
一は輪奐たる樓臺に顯官が客を引く如く、一は幽閑なる茅
屋に高士が梅を愛するに似たり。これらの差別は、蓋し其
の初よりして然りしにあらず、各自獨立したる歴史が漸次
に養成したるものにして、今はた兩洋交通の歴史によりて
これを合一せんとする傾向あるなり。

我が國の文藝に於ける佛教の感化の甚深なることは、多
言を要せず。眞の美術の歴史といふは聖德太子の佛教興
隆に始り、爾來進歩劇甚、以て偉大なる奈良朝に及べり。さ
れど此の時代も、彫塑に於てこそ千古無比の名を博すべけ

巨勢金岡
光孝・宇多の
諸帝に歴仕
す。歿年不詳。

丹青
丹誠

法成寺
京都京極土御
門にあり藤
原道長の創
建に係る。後
滅に歸す。
法勝寺
京都岡崎に
あり。白河天皇
の創建。足利
氏の末に廢滅
す。

れ、繪畫の歩調は未だこれに伴はず、平安朝に巨勢金岡が出
てし頃より、漸く丹青全盛の世は來れるなり。而して奈良
朝の彫塑がなべて佛像なるが如く、平安朝の繪畫も概して



地蔵尊 (筆岡金)

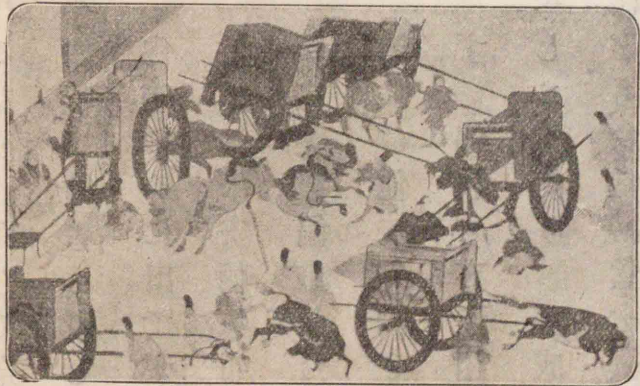
佛畫の外に出でず。
按ふに平安朝の如く
形式美を偏重したる
時代は、他に類例を見
ず。佛教も亦形相の

具足によりて、内心の信仰に近づくべしとしたり。法成寺
法勝寺の如き、今廢墟をだに存せざれども、金堂講堂七寶莊
嚴、天を摩する大塔、虹と曳く廻廊、すべて一代の工を盡しし

鳳凰堂
山城國宇治に在り

龍頭の舟
龍頭鷓首

状態は、歴史の傳ふるところ。今に存する鳳凰堂を見ても、其の一端を覗ふべし。香煙徐ろに薫じて幢幡を掠め、蓮華頻りに散つて轉讀にたぐふ。龍頭の舟は池上に浮んで笙鼓月に冴え、頻伽の袖は庭前に翻りて舞容風に堪へず。恰もこれ坐ながらなる極樂淨土、紫雲の來迎を待たずして、身は既に汚濁世界を離る。かくの如き場に用ふる畫像なれば、彩華炫耀、丹碧映射、其の色は珊瑚水晶を碎き、其の線は黄金の箔を切り、或は慈悲



平治物語繪卷

平治物語繪卷

住吉慶恩畫き
藤原家隆詞書すといふ

圓光大師畫傳

土佐吉光畫き
伏見天皇外七家の詞書あり

雪舟

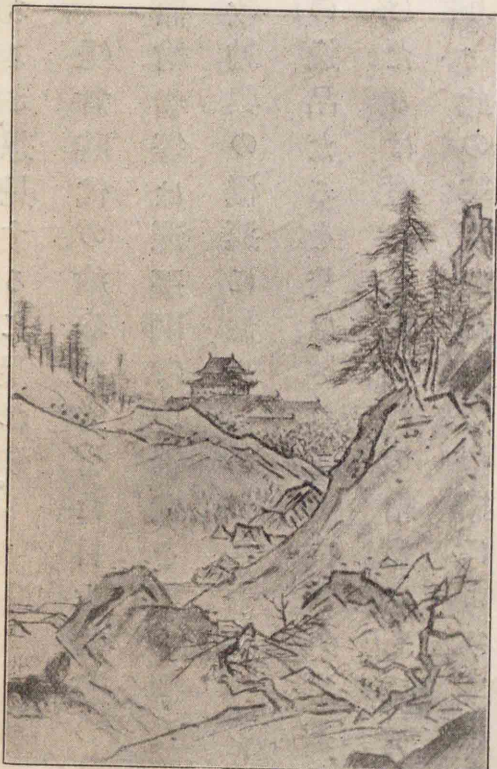
名は等揚。備中の入。畫僧。備後明し、歸朝。後山口の雲谷寺に住む。永正三年(約四二〇年前)歿。年八十七。

圓滿、或は忿怒破邪、十分に濃く、あくまで鮮かに、精を窮め微を闡きて、後世の乾枯洒脫なるものとは全く撰を殊にしたるここ、想見するに足れり。

鎌倉時代の繪卷物もまた日本繪畫の精華なり。平治物語繪卷等は源平鬪争の慘狀を寫し、圓光大師畫傳等は新佛教勃興の機運に従ふ。いづれも時代の反映にして、又不朽の逸品たるを失はざれども、内容外形共に根本の變化を受けたるは、實に東山時代の繪畫にして、僧雪舟其の代表者たり。此の革新は禪宗の提撕によりて成り、鎌倉時代に此の宗の傳來せしより漸く養ひ來れる勢力の、こゝに頂點に達したるものにして、香茶の技と榮枯を共にせり。抑、平安朝

禪刹
梵刹

の佛寺を去つて禪刹の門をくゞるや、彼此別天地の感なくんばあらず。結跏趺坐して寂靜の境に入れば、物の美醜も



(筆舟雪) 水山景夏

精神を主として形體に泥ます。例へば能樂に何等の背景を設けずして、しかも能く雲煙萬里の情趣を偲ばしむるが

目を遮らず。一旦其の道に悟入すれば、經典佛像何の要かあらん。教外別傳といひ、以心傳心といひ、

餘韻
遺韻

如し。繪畫もこれに同じく、色を棄てて筆に託し、巧を抛ちて氣を驅り、蒼枯にして恬澹、破墨一掃して遠山を産み、秃筆數行にして樹石を刻む。一見すれば兒戲、熟視すれば神工、ますく、味はうてますく、趣あり。恍惚として、吾、我を忘る。即ちこれ東山時代の特色にして、流風餘韻延いて近代に及べり。

桃山時代は豪華の氣一世を蓋ひ、繪畫もや、移りて雄大穠麗の風を喜びしといへども、いまだ東山の根據を衝くに及ばざりき。江戸時代に至つて、幕府が消極の方針は、更に其の規模を縮めて枯淡の域に歸らしめ、門閥の貴に誇れる狩野住吉も先人の糟粕を嘗むるのみ。元祿の盛時には、装

狩野 狩野正信に起
り元信の大成
せる一派
住吉 士佐派の一
派。鎌倉時代
の住吉慶恩に
起るといふ。

光琳
尾形氏、京都の人、享保元年(約一〇一〇年)歿。

一蝶

英氏、大阪の人、享保九年(約一〇〇九年)歿。

菱川師宣

安房の人、號友竹、歿年は元禄七年(約一六八八年)の交といふ。

大雅

池野氏、京都の人、安永五年(約一五〇五年)歿。

應舉

岡山氏、丹波の人、寛政七年(約一三〇七年)歿。

飾に傾ける光琳、滑稽の才ある一蝶あり、菱川師宣以來の浮世繪が時世粧を寫して、山水花鳥以外に題目を求めたるは、最も注意すべし。雖も、鄙俗に流れて、遂に高尚なる趣味に



(筆堂雅大)山終嶺

應ずる能はず。大雅等の文人畫は、東山の繪畫に比するに、全然別種のものに屬すれど、匠氣を忌み、形似を疎にし、氣韻生動を第一義とする所は即ち相似たり。應舉等の寫生畫

訥言

田中氏、京都の人、文政六年(約一八二四年)歿。

容齋

菊池氏、名は武保、明治十一年(約一八七九年)歿。

は自然の摸寫に力めて、別に一流を立てたるものなれども、亦清淡洒脫の習を脱するを得ず。訥言が創めたる土佐古



(筆舉應)虎

此は彼の如き價值なきを憾とするのみ。一派又一派、おのおの盛衰の數を免れざりしが、いまだ其の間に崛起して斯道の根本的革新に成功せる者なく、かゝる裡に明治の昭代

風、容齋が好める歴史畫の如きは、即ち學界に於ける國學の興隆に齊しく、又時勢の反響なり。但し

一派又一派、おのおの盛衰の數を免れざりしが、いまだ其の間に崛起して斯道の根本的革新に成功せる者なく、かゝる裡に明治の昭代

は來れり。(東圃遺稿)

阿佛尼

平度繁の女、藤原爲家の後室。阿佛は法名。

一三三 いさよふ月

阿佛尼

むかし、壁の中より求め出でたりけん書の名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも身の上の事は知らざりけりな。水莖の岡の葛の葉かへすも書き置く跡たしかなれども、かひなきものは親のいさめなり。又、賢王の人をすて給はぬ政にももれ、忠臣の世を思ふ情にも捨てらるゝものは、數ならぬ身一つなりけりと思ひ知りながら、又さてしもあらで、なほこのうれへこそやるかたなく悲しけれ。更に思ひつゞくれば、やまごうたの道は、たゞ誠少く、あ

壁の中より

魯恭王使人於壁中石函、得古文孝經二十二卷(古文孝經序)

なるすさびばかりかと思ふ人もやあらん。日本の本の國に、天の窟戸開けし時、よもの神だちの神樂の詞をはじめて、世を治め物を和ぐる媒となりけるこそ、この道の聖だちはしるし置かれたりける。

二たび救をうけて

藤原爲家、實治中、續後撰集を撰し、古今永中、續古今集を撰す。

三人のをのこ

爲顯・爲相・爲守

さて、また集を撰ぶ人は例多かれど、二たび救をうけて、世々に聞えあげたるは、たゞひ猶ありがたくやありけん。そのあごにしも携はりて、三人のをのこども、百千の歌の古反故どもを、いかなるえにかありけん、預りもたるこそあれど、道を助けよ、子をはぐゝめ、後の世をこへ。さて、深き契を結びおかれし細川の流も、故なくせきごめられしかば、後こふ法の燈も、道を守り家を助けん親子の命も、諸共に、きえを

細川

播州細川莊。

心の闇

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるか(藤原兼輔)

いよふ月

建治三年(約六五〇年前)十月十六日

降りみ

神無月、降りみ降らずみ定めなき時雨ぞ冬のはじめなりける(後撰集)

人やりならぬ道

人やりの道ならなく大方はいきうしといひていざ歸りなん(古今集、源實)

争ふ年月を経て、危く心細きものから、何ぞしてつれなく今日までには存ふらん。惜しからぬ身一つは、やすく思ひすつれども、子を思ふ心の闇は、なほ忍びがたく、道を顧みるうらみは、やらん方なく、さても、なほあづまの龜の鑑にうつさば曇らぬ影もやあらはるゝご、せめて思ひ餘りて、よろづの憚を忘れ、身をえうなきものになし果てて、ゆくりもなく、いざよふ月にさそはれ出でなんごぞ思ひなりぬる。

頃は、み冬たつはじめの定めなき空なれば、降りみ降らずみ、時雨も絶えず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙ごごもに亂れ散りつゝ、事にふれて心細く悲しけれど、人やりならぬ道なれば、いきうしごても、ごゝまるべきにもあらで、何ぞなく急ぎ立ちぬ。

立ちぬ。

侍従

爲相。

大夫

爲守、後出家して曉月といふ。

目かれせざりつる程だに荒れまさりつる庭も籬も、ましてご見まはされて、慕はしげなる人々の袖の雫も慰めかねたる中にも、侍従、大夫などの、あながちにうち屈したるさま、いご心苦しければ、さまざま、いひこしらへぬ。

代々に書きおかれける歌の草子どもの奥書などして、あだならぬ限を選びしたゝめて、侍従の方へ送るごて、書きそへぬる歌。

和歌の浦にかきごめたる藻鹽草

これをむかしのかたみごも見よ

あなかしこ横波かくな濱千鳥

十六夜日記
阿佛尼の作、
尼が京より鎌
倉へ下れる時
の旅行記。一
卷。

新月 上弦 下弦 十三夜 望 十六夜 立待月
居待月 臥待月 有明月

一四 東路の旅

駒牽渡る
相阪の關の清
水に影見えて
今やひくらん
望月の駒(拾
遺集、紀貫之)
遊子
買島の曉賦
に、遊子猶行
於殘月、函谷
雞鳴(和漢朗
詠集)
藁屋床
世の中はとて
もかくても過
わらやもはて

東山の邊なる住家を出でて、逢阪の關打過ぐるほどに、駒牽き渡る望月の頃もや、近き空なれば、秋霧立ち渡りて、深き夜の月影ほのかなり。木綿附鳥かすかに音づれて、遊子なほ殘月に行きけん、函谷の有様思ひ合はせらる。昔、蟬丸さいひける世捨人、この關の邊に、藁屋の床を結びて、常に琵琶を弾きて心をすまし、大和歌を詠じて懷を述べけり。

しなければ。
(蟬丸の歌と
いひ傳ふ)

打出の濱、
粟津の原
共に滋賀縣滋
賀郡にあり

古の藁屋の床のあたりまで

こゝろをこむる逢阪の關

關山を過ぎぬれば打出の濱、粟津の原など聞けども、いまだ夜のうちなれば、さだかにも見えわかず。昔、天智天皇の御代、大和國飛鳥の岡本の宮より、近江の志賀の郡に都うつりありて、大津の宮を造られたり、聞くにも、このほどは舊き皇居の跡ぞかし、おぼえてあはれなり。

さゝなみや大津の宮のあれしより

名のみ残れる滋賀のふるさこ

曙の空になりて瀬多の長橋うちわたすほどに、湖遙かにあらはれて、かの滿誓沙彌が、比叡山にてこの湖を望みつゝ

滿誓沙彌
右大辨笠麻
呂、養老五年
出家。

漕ぎゆく舟
上句「世の中
は何にたとへ
む朝ぼらけ」
(拾遺集)

よめりけん歌思ひ出でられて、漕ぎゆく舟のあごのしら浪。
まここにはかなく心ぼそし。

世の中を漕ぎゆく舟によそへつゝ

眺めし跡をまたぞながむる

このほどをも行きすぎて、野路といふ處にいたりぬ。草
の原露しげくして、旅衣いつしか袖の雫こころせし。

あづま路の野ちの朝露けふやさは

袂にかゝるはじめなるらん

篠原といふ處を見れば、西東へ遙かに長き隄あり。北に
は里人住家を占め、南には池の面遠く見えわたる。むかひ
の汀、緑深き松のむらだち、波の色も一つになり、南山の影を

篠原

滋賀縣野洲

南山の影

影浸南山青
況深(新撰朗
詠集)

飛鳥の河

世の中は何か
常なる飛鳥
川、きのふの
瀬ぞ今日は瀬
になる(古今
集、續人しら
ず)

ひたさねども、青くして滉瀟たり。洲崎處々に入りちがひ
て、葦かつみなど生ひわたれる中に、鴛鴨の打群れて飛びち
がふさま、葦手を書けるやうなり。昔、都を立つ旅人、この宿
にこそ泊りけるが、今は打過ぐる類のみ多くして、家居もま
ばらになり行くなど聞けば、變り行く世の習、飛鳥の河の淵
瀬には限らざりけりこ覺ゆ。

行く人もごまらぬ里となりしより

あれのみまさる野路の篠原

鏡の宿に至りぬれば、昔なゝの翁のよりあひつゝ、老を厭
ひてよみける歌の中に、鏡山いざ立ちよりて見てゆかん、年
へぬる身は老いやしぬること。こいへるは、この山の事にやこ

鏡の宿

滋賀縣蒲生

鏡山の歌

古今集雜に出
で註に、或人
いはく、大伴
黒主がなり
と見ゆ。

おぼえて、宿もからまほしく覺えたれども、なほおくさまに訪ふべき處ありて打過ぎぬ。

たち寄らでけふは過ぎなん鏡山

しらぬおきな影は見ずとも

行暮れぬれば、武佐寺といふ山寺のあたりに宿りぬ。まばらなる床の秋風、夜ふくるまゝに身にしみて、都にはいつしか引きかへたる心地す。枕に近き鐘の聲、曉の空に音づれて、かの遺愛寺の邊の草の庵の寢覺も、かくやありけんこ哀なり。行末遠き旅の空思ひ續けられて、いさいたう物悲し。

都出でて幾日もあらぬ今宵だに

しらぬおきな
な
増鏡そこなる影にむかひあるて見る時にこそしらぬ翁に逢ふ心地すれ
(拾遺集、旋頭歌)
武佐寺
滋賀縣蒲生郡武佐村長光寺
遺愛寺
香爐峰下にあり、白樂天の山居に近き處。遺愛寺鐘歌、枕聽、香爐峰、雪、藤、簾、看、(白氏文集)

醒ヶ井
滋賀縣阪田郡醒井村。

西行が歌
新古今集夏の部に、題不知りとして載せたり。

柏原
滋賀縣阪田郡柏原村。
關山
岐阜縣不破郡關原村なる不破の關。

かたしきわびぬここの秋風

音に聞きし醒ヶ井を見れば、陰くらき木の岩根より流れ出づる清水、あたり涼しきまで澄渡りて、げに身にしむばかりなり。餘熱未だ盡きざる程なれば、往還の旅人多く立寄りて涼み合へり。かの西行が「道のへに清水流るゝ柳蔭、しばしとてこそ立ちこまりつれ。」と詠めるも、かやうの處にや。

道のへの木蔭の清水むすぶとて

しばし涼まぬ旅人ぞなき

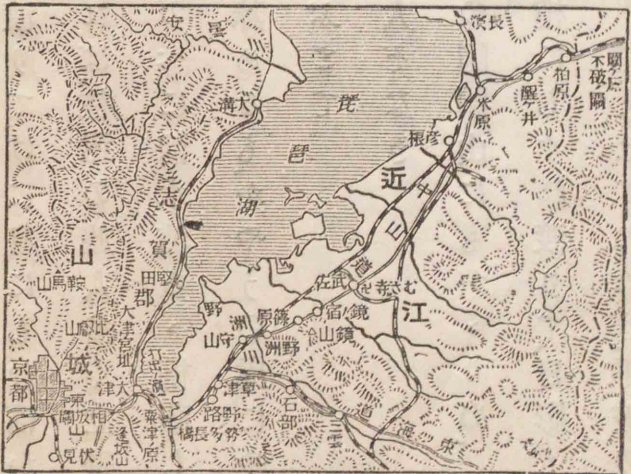
柏原といふ處を立ちて美濃の國關山にもかゝりぬ。谷川霧の底にも音づれ、山風松の梢にしぐれ渡りて、日影も見えぬ木の下道、あはれに心細し。越えはてぬれば、不破の關

後京極
藤原良經。
人住まぬ
上句「人すまぬ不破の關屋の板庇」(新古今集)

株瀨川
岐阜縣不破郡にあり、今の呂久川ならんといふ。

屋なり。萱屋の板庇年經にけり。見ゆるにも、後京極攝政殿の「荒れにし後はたゞ秋の風。」よませ給へる歌思ひ出でられて、この上は風情もめぐらし難ければ、鄙しき言の葉を残さんもなかくに覺えて、此處をば空しく打過ぎぬ。

株瀨川といふ處に泊りて、夜更くる程に川端に立出でて見れば、秋の最中の晴天、清き川瀨にうつろひて、照る月なみ



照る月なみ
水のおものに照る月なみを數ふればこよひぞ秋のものなかなりける。(拾遺集、源順)

東關紀行
京都より鎌倉に至る紀行の文。源順の一作と傳ふ。一卷。

も數見ゆるばかりに澄渡れり。二千里の外の故人の心思ひやられて、旅の思いこゝ抑へ難く覺ゆれば、月の影に筆を染めつゝ、花洛を出でて三日、株瀨川に宿して一宵、しばし幽吟を中秋三五夜の月に傷ましめ、かつく遠情を前途一千里の雲に送る。など、或家の障子に書附くるついでに、知らざりき秋の半ばの今宵しも
かゝる旅寢の月を見んこは (東關紀行)

旅

家であれば筥にもる飯を草枕たびにしあれば
椎の葉にもる
有馬 王子
旅にして剪りたる爪の黒くなりて又剪りぬべく
石 樽 千 亦
日數經にけり

谷崎潤一郎

東京の人、文學者。

鳳兮鳳兮

論語、微子篇に出づ。

左丘明

支那周代の學者、孔子の門人、「左傳」の著者。

孟軻

支那周代の賢人、「孟子」の著者。

司馬遷

支那漢代の儒者、「史記」の著者。

魯の國

支那周代の一諸侯の國。今の山東省兗州府地方。

泗水

山東省にあり。

一五 麒麟



谷崎潤一郎

谷崎潤一郎

鳳兮鳳兮。何徳之衰。

往者不可諫。來者猶可追。

已而已而。今之從政者殆而。

西曆紀元前四百九十三年、左

丘明・孟軻・司馬遷等の記録によ

れば、魯の定公が十三年目の郊の祭を行はれた春の始、孔子は數人の弟子たちを車の左右に従へて、その故郷なる魯の國から傳道の途に上つた。

泗水の河の畔には芳草が青々と芽ぐみ、防山・尼丘・五峰の頂の雪は融けても、沙漠の砂を擱んで來る匈奴のやうな北風は、いまだに

子路

孔子の門人、仲由の字。

顔淵

名は回、孔子の門人。

曾參

孔子の門人、字は子輿。

樊遲

名は須、孔子の門人。

われ魯を

子欲望魯乎、龜山蔽之、手無斧柯、奈三龜山何、(文體明辨)



孔子 (探幽筆)

烈しい冬の名残を吹送つた。元氣のよい子路は紫の貂の裘を翻して一行の先頭に進んだ。考へ深い眼付をした顔淵、篤實らしい風采の曾參が、麻の履を穿いてその後を續いた。正直者の御者の樊遲は、駟馬の銜を執りながら、時々車上の夫子が老顔を窺み視て、傷ましい放浪の師の身の上に涙を流した。或日愈、一行が魯の國境までやつて來ると、誰も彼も名残惜しさうに故郷の方を振り返つたが、通つて來た路は龜山の蔭に隠れて見えなかつた。すると孔子は琴を執つて、われ魯を望まんぞ欲すれば

龜山これを蔽ひたり。

手に斧柯なし、

龜山をいかにせばや。

かういつて、さびた皺唄れた聲で歌つた。これから又北へくく三日ばかり旅を續けると、廣々とした野に、安らかな屈託のない歌の聲が聞えた。それは、鹿の裘に索の帶をしめた老人が、畦路に落穂を拾ひながら歌つてゐるのであつた。

「由や、お前にはあの歌がどう聞える。」

と、孔子は子路を顧みてたづねた。

「あの老人の歌からは、先生の歌のやうなあはれな響が聞えませ



(筆幽探) 子 顔

老子

姓は李、名は耳、字は聃、周代の思想家、道家、道教の祖。

子貢

端木賜の字、孔子の門人。

ん。大空を飛ぶ小鳥のやうな、恣な聲で歌つて居ります。」

「さもあらう。彼こそ古の老子の門弟ぢや。林類といつてもはや百歳になるであらうが、あの通り春が来れば畦に出て、何年になく歌を歌うては穂を拾うてゐる。誰か彼處へ行つて話をして見るがよい。」

かういはれたので、弟子の一人の子貢は、畑の畔へ走つて行つて老人を迎へ、たづねていふには、

「先生はさうして歌を歌うては落穂を拾うていらつしやるが、何も悔いるところはありませぬか。」

併し老人は振向もせず、餘念もなく落穂を拾ひながら、一步々々に歌を歌つて止まなかつた。子貢がなほもその跡を追うて聲をかけるに、老人は漸く歌ふことをやめて、子貢をつくづく眺めた後、「わしに何の悔があらう。」

しみこの色を湛へてゐた。その國の麗しい花は、宮殿の妃の眼を喜ばす爲に移し植ゑられ、肥えた豕は妃の舌を培ふ爲に召上げられ、長閑な春の日は灰色にさびれた町をいたづらに照らした。さうして都の中央の丘の上には、五彩の虹を繡ひ出した宮殿が、血に飽いた猛獸の如くに、屍骸のやうな街を瞰下してゐた。その宮殿の奥で打鳴らす鐘の響は、猛獸の嘯くやうに國の四方へ轟いた。

「由や、お前にはあの鐘がどう聞える。」

と、孔子はまた子路にたづねた。

「あの鐘の音は、天に訴へるやうな、はかない先生の調とも違ひ、天に打任せたやうな、自由な林類の歌とも違つて、天に背いた歡樂を讚へる、恐ろしい意味を歌うて居ります。」

「さもあらう。あれは昔衛の襄公が、國中の財と汗とを絞取り取つて造られた林鐘といふものぢや。その鐘が鳴る時は御苑の林か

ら林へ反響して、あのやうな物凄い音を出す。又暴政に苛まれた人々の呪と涙とが封じられてゐて、あのやうな恐ろしい音を出す。」と、孔子は教へた。

衛の君の靈公は、國原を見晴るかす靈臺の欄に近く、雲母の硬屏、瑪瑙の榻を運ばせて、青雲の衣を纏ひ、白霓の裳裾を垂れた夫人の南子と、香の高い秬鬯キョウを酌みかはしながら、深い霞の底に眠る野山の春を眺めて居た。

「天にも地にも、うらゝかな光が泉のやうに流れてゐるのに、何故私の國の民家では美しい花の色も見えず、快い鳥の聲も聞えないのであらう。」

かういつて、公は不審の眉を顰めた。

「それはこの國の人民が、わが公の仁徳と、わが夫人の美容とを讚へるの餘り、美しい花とあれば、悉く献上して宮殿の園生の牆に移

靈公
名は元、襄公
の子。

し植ゑ、國中の小鳥までが、一羽も残らず花の香を慕うて園生のめぐりに集るからでございます。」
と君側に控へた宦官の雍渠が答へた。するこそその時、さびれた街の静けさを破つて、靈臺の下を過ぎる孔子の車の玉鑾が珊珊と鳴つた。

堯 支那古代の聖王。
舜 支那古代の聖王。
皋陶 舜に仕へた賢人。

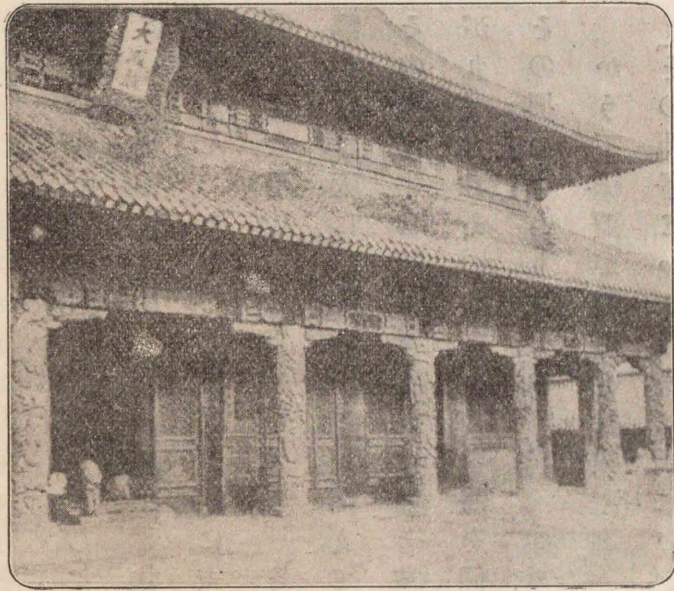
「あの車に乗つて通る者は誰であらう。あの男の額は堯に似てゐる。あの男の目は舜に似てゐる。あの男の項は皋陶に似てゐる。肩は子産に類し、腰から下が禹に及ばぬこと三寸ばかりである。」
と、これも側に伺候してゐた將軍の王孫賈が、驚の眼を見張つた。
「しかし、まああの男は、何といふ悲しい顔をしてゐるのだらう。將軍卿は物識だから、あの男がどこから來たか、わたしに教へてくれたがよい。」

子産 支那春秋時代の鄭の賢相。
禹 支那古代の聖王。

かういつて、南子夫人は將軍を顧みつゝ、走り行く車の影を指さした。

文王 名は昌、周の武王の父。

「私は若い時諸國を遍歴しましたが、周の史官を勤めてゐた老聃といふ男の他には、まだあれほど立派な相貌の男を見たことがありません。あれこそ故國の政に志を得ないで傳道の途に上つた魯の聖人の孔子であります。その男の生れた時、魯の國には麒麟が現れ、天には和樂の音が聞えて、神女が天降つたと申します。その男は牛の如き唇、虎の如き掌、龜の如き背、身を持ち、身の丈が九尺六寸あつて、文王の容體を備へてゐると申します。彼こそその男に違ありません。」
かう王孫賈が説明した。
「その孔子といふ聖人は、人にいかなる術を教へる者であるか。」
と靈公は手に持つた盃を乾して、將軍に問うた。



曲阜孔子廟

「聖人といふものは、世の中のすべての知識の鍵を握つて居ります。しかしあの人は、専ら家を齊へ、國を富まし、天下を平かにする道を、諸國の君に授けるご申します。」

將軍が再び説明した。

「わたしは世の中の美色を求めて南子を得た。又四方の財寶を萃めてこの宮殿を造つた。この上は天下に覇を唱へて、この夫人ご宮殿ごにふさはしい權威を持ちたく思つてゐる。ごうかしてその聖人をこゝへ呼び

屈産の馬
晋の屈といふ
地方に産する
良馬

いれて、天下を平かにする術を授かりたいものぢや。」

ご公は卓を隔て、對してゐる夫人の唇を覗つた。何ごなれば、平生公の心をいひ表はすものは、彼自身の言葉ではなくて、南子夫人の唇から洩れる言葉であつたから。

「わらはは世の中の不思議といふものに遇つて見たい。あの悲しい顔をした男が眞の聖人なら、わらははに色々な不思議を見せてくれるであらう。」

かういつて、夫人は夢見るやうな瞳をあげて、遙かに隔り行く車のあごを眺めた。

孔子の一行が北宮の前にさしかゝつた時、賢い相を持つた一人の官人が、大勢の供を従へ、屈産の駟馬に鞭うち、車の右の席をあげて、恭しく一行を出迎へた。

「私は靈公の命を受けて先生をお迎へに出た仲叔圉ご申すもの

三王
三代の聖王。
即ち夏の禹
王、殷の湯王、
周の文王武
王。

でございませう。先生がこの度傳道の途に上られたことは、四方の國々までも聞えて居ります。長い旅路に先生の翡翠の蓋は風に綻び、車の軛からは濁つた音が響きます。願はくはこの新しい車に召替へられ、宮殿に駕を枉げて、民を安んじ國を治める先王の道を我等の公に授け給へ。先生の疲勞を癒す爲には、西圃の南に水晶のやうな温泉が沸々こたぎつて居ります。先生の咽喉を濕す爲には、御苑の園生に芳しい柚橙橘が甘い汁を含んで實のつて居ります。先生の舌を慰める爲には、苑圃の檻の中に肥え太つた豕熊豹牛羊が蓐のやうな腹を抱へて眠つて居ります。願はくは二月も、三月も、一年も、十年も、この國に車を駐めて、愚かな私たちの曇つた心を啓き、盲ひた眼を開いて下さいませ。」

と仲叔圉は車をおりて慇懃に挨拶をした。

「私の望むところは、莊麗な宮殿を持つ王者の富よりは、三王の道

桀紂
夏の桀王と殷
の紂王。

手
摻々たる女
糾々葛屨、可
以履之。霜、摻
々女手、可二以
縫二裳、(詩經)

を慕ふ君公の誠であります。萬乗の位も桀紂の奢の爲にはなほ足らず、百里の國も堯舜の政を布くには狭くはありませぬ。靈公がまことに天下の禍を除き庶民の幸を圖る御志ならば、この國の土に私の骨を埋めても悔いませぬ。」

斯く孔子は答へた。

やがて一行は導かれて、宮殿の奥深く進んだ。一行の黒塗の沓は、塵も止めぬ砥石の床に憂々こ鳴つた。

摻々たる女手、

以て裳を縫ふべし。

と、聲をそろへて歌ひながら、大勢の女官が梭の音たかく錦を織つてゐる織室の前も通つた。錦のやうに咲きこぼれた桃の林の陰からは、苑圃の牛の懶げに唸る聲も聞えた。

靈公は賢人仲叔圉のはからひを聽いて、夫人を始め一切の女を

遠ざけ、歡樂の酒の沁みた唇を濯ぎ、衣冠正しく孔子を一室に請じて、國を富まし、兵を強くし、天下に王となる道を質した。

しかし聖人は人の國を傷つけ、人の命を損ふ戦のことに就いては、一言も答へなかつた。又民の血を絞り、民の財を奪ふ富の事に就いても教へなかつた。さうして、軍事よりも、産業よりも、第一に道德の貴いことを嚴かに語つた。力を以て諸國を屈服する覇者の道と、仁を以て天下を懐ける王者の道との區別を知らせた。

「公よ、まことに王者の徳をお慕ひなさるなら、何よりもまづ私の慾にうち克ち給へ。」

これが聖人の誠であつた。その日から靈公の心を左右するものは、夫人の言葉でなくして、聖人の言葉であつた。朝には廟堂に參して正しい政の道を孔子に尋ね、夕には靈臺に臨んで天文四時の運行を孔子に學んだ。錦を織る織室の梭の音は、六藝を學ぶ官

人の弓弦の音蹄の響、筆策の聲に變つた。一日公は朝早く獨り靈臺に上つて國中を眺めると、野山には美しい小鳥が囀り、民家には麗しい花が咲き、百姓は畑に出て公の徳を讚へ歌ひながら耕作にいそしんでゐるのを見た。公の眼からは熱い感激の涙が流れた。

(谷崎潤一郎篇)

一六 寂しき心

生田春月

生田春月
名は清平、島根縣の人、詩人

一

おろかなる心を、

神よ、まもりたまへ。

世の賢き人々の中に、

傷つき迷ふ

おろかなる心を。

おろかなればこそ
汝は救はれん。
まことの光に
てらされん、
おろかなればこそ。

二

人の心を心にむすぶ
目に見えぬ紐、
その一條は
世の悲しみよ、寂しきよ。
生きとし生ける人の胸に、

限りも知らぬ寂しきが、
雲の如くに涌くときは
離れくし人も相寄る。
煩惱具足の身もちて
世の妄執に身をまかす、
はかなき人心、
それをもかすかに照らす光。
その束の間の閃きは、
人のさだめの寂しきよ。
この寂しさを知らぬ人は、
まことを知らず、愛を知らず。

寂しき心、この心
痛み傷つき、相寄れば、
冬枯の野も花咲かん。
花は心のまことのみ。

(近代名詩選)

一七 菅公の左遷

醍醐の帝の御時、時平のおごど左大臣の位にて、年いそ若くておはしき。菅原のおごどは右大臣の位にておはします。そのをり、みかど御年いそ若くおはします。左右大臣に世の政を行ふべき宣旨下さしめ給へりしに、そのをり左大臣御年二十八九ばかり、右大臣の御年五十七八ばかりに

時平

藤原時平。

菅原

菅原道真。

下さしめ給ふ
下させ給ふ

やおはしけん。共に世の政をうちせしめ給ひし程に、右大臣はざえも世にすぐれめでたくおはしまし、御心おきても殊の外にかしこくおはしまし、左大臣は御歳も若く、ざえも殊の外に劣り給へるによりて、右大臣御おぼえ殊の外におはしましたるに、左大臣安からずおぼしたる程に、さるべきにやおはしけん、右大臣の御爲によからぬこと出で来て、昌泰四年正月二十九日、太宰権帥になし奉りて、流され給ふ。この大臣の子ども數多おはせしに、女君たちは婿取し、男君たちは皆程々につけて位どもおはせしを、それも皆方々に流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君、女君たち慕ひ泣きておはしければ、小さきはあへなん。ご公も許さしめ

だに
さへ
すら

給ひしかば、共に率て下り給ひしぞかし。帝の御掟極めて
生憎におはしませば、この御子どもを同じかたにだに遣さ
ざりけり。方々にいと悲しく思召して、御前の梅の枝を御
覽じて、

東風吹かばにほひおこせよ梅の花

あるじなしとて春なわすれそ

又、亭子の帝にきこえさせ給ふ。

流れゆくわれは水屑になりはてぬ

君しがらみとなりてこゝめよ

なき事によりかく罪せられ給ふを、からく思し歎きて、やが
て山崎にて出家せしめ給ひてけり。都遠くなるまゝにあ

山崎

山城國乙訓郡
山崎村

亭子の帝
宇多法皇。

はれに心細くおぼされて、

君がすむ宿の梢をゆくも

隠るゝまでにかへりみしはや

また播磨の國におはしつきて、明石のうまやこいふ處に
御宿りせしめ給ひて、驛の長のいみじう思へる氣色を御覽
じて、作らせ給へる詩いと哀し。

驛長無驚時變改。一榮一落是春秋。

かくて筑紫におはしまし著きて、あはれに心細く思さる
る夕、遠方に處々煙立つを御覽じて、

夕されば野にも山にもたつけぶり

なげきよりこそもえまさりけれ

山(に)わか

月日こそは
照し給はめ
とこそはあ
めれ

大貳の居所
太宰の師の下
に大貳あり
帥の京に在る
こと常なれ
ば、太宰府を
直ちに大貳の
居處といふ

また雲の浮きて漂ふを御覽じても、

山わかれ飛びゆく雲の歸り來る

さきぞなほ頼まるゝ

さりともご、世を思召されけるなるべし。月のあかき夜、

海ならずたゞよふ水の底までも

きよきころは月ぞてらさん

これいごかしこくあそばしたりかし。げに月日こそは照

らし給はめごこそはあめれ。

筑紫におはします所の御門も固めておはします。大貳

の居處は遙かなれども、樓の上の瓦などの、心にもあらず御

覽じやられけるに、又いご近く觀音寺といふ寺のありけれ

ば、鐘の響をきこしめして作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔看五色。

觀音寺只聽鐘聲。

「これは文集の白居易が、遺愛寺鐘

欵枕聽。香爐峯雪撥簾看。」といふ

詩にもまさざまに作らしめたま

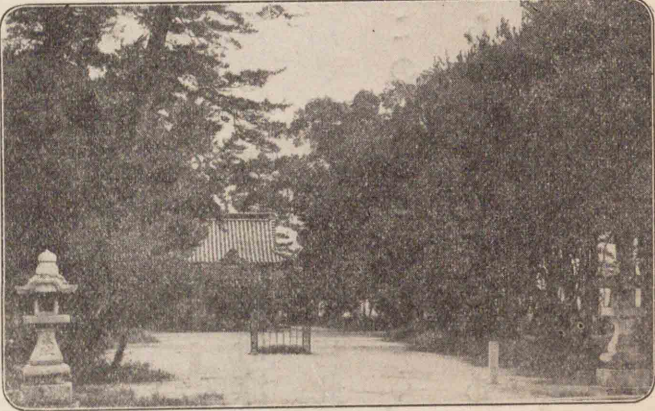
へり。ごこそ、昔の博士どもは申し

けれ。

また、かの筑紫にて九月十日菊

の花を御覽じけるついでに、まだ

京におはしましし時、九月の今宵内裏にて菊の宴ありしに



菅公館址(太宰府観音寺)

白居易

晩唐の詩人、
字は樂天。

遺愛寺

「香爐峯下、新
下山居、紳堂
初成」と題す
る律詩の二
句。

ま
ま(り)お

作らしめ給へりける詩九日後朝同賦秋思應詩制と題する

この大臣作らしめ給へりける詩を、御門かしこく感じ給ひて、御衣たまはせ給へりしを、筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽するに、いごゞその折思召しいでて作らせたまひける。

去年今夜侍清涼。

秋思詩篇獨斷腸。

恩賜御衣今在此。

捧持毎日拜餘香。

この詩いごかしこく、人々感じ申されき。このこごども、只ちりゝなるにもあらず、かの筑紫にて作り集めさせ給へりけるを書きあつめ、一卷ごせしめたまひて、後集ご名づけられたり。また折々の歌を書きおかせ給へりける、おのづから世に散りきこえしなり。

後集
菅家後集。

かわく

うせ給へり時に延喜三年三月二十五日

北野宮官幣中社北野神社。京都の西北隅にあ

安樂寺太宰府村。今天平宮のある處。

大鏡八卷、作者未詳、文徳天皇より後一條天皇の假名文の歴史。

また雨の降る日、うちながめ給ひて、

あめの下かわける程のなればや

著てしぬれぎぬひるよしもなき

やがてかしこにてうせ給へり。

夜の中に、この北野にそこの松をおほさしめたまうて、渡り住みたまふこそは、唯今の北野宮ご申して、あら人神におはしますめれ。おほやけも行幸せしめたまふ。いごかしこくあがめ奉りたまふめり。筑紫のおはしましどころは安樂寺ごいひて、おほやけより別當所司などなさせ給ひて、いごやんごごなし。(大鏡)

榮落
榮枯

太宰府の配處は、昔公に取りて絶好の詩境なりき。外に名利の競争なく、内に危殆の憂悶なし。公や靜かに往時を懷慕し現境を思料し、詠歎によりてその衷情を遣るべきなり。天は公に授くるに詩人の天分を以てし、而してまづ公に與ふるに政治家の境遇を以てしたりき。公の政治家たりしや、煩惱内に公を苦しめ、讒奸外に公を陥れ、遂に公をして無告の流人たらしめき。然れども悲しいかな、かくの如くなるにあらずんば公は遂に詩人たる能はざりしならん。而も公は死に至るまで、この天分の地に居るを悲しみ、靜かに春秋の榮落を觀じて、何時か昔日の榮華に歸るあらん事を望みたりき。この憂愁と希望との現るゝ所に、公の天分は遂に大成せられたり。而して公自らは毫もこれを知らざりしなり。嗚呼、天道の冷酷無情、一に何ぞこゝに至るや。(昔公と天分—高山樗牛)

一八 人生の快事

三宅雪嶺



三宅雪嶺 二 郎

「大上有立德、其次有立功、其次有立言、雖久不廢、此之謂不朽。」と曰へるは、穆叔以前より行はれたるりし格言なるべく、穆叔以後數千年を経て變ぜず。註に立德は黃帝堯舜、立功は禹稷、立言は史佚、周任、臧文仲とあり。他の例を擧ぐれば、孔子、釋迦、耶穌の如きを立德とし、該撤奈破崙の如きを立功とし、ホーマー以下の文學者を立言とすべし。この三不朽を智仁勇の達徳に配當せば、立德は仁、立功は勇、而して立言は智なり。立功にも智を要し、立言にも勇を要すれど、主要なるものを擧ぐれば各、

三宅雪嶺 名は雄二郎、石川縣の人、文學博士。
大上有立德 左傳に出づ。
穆叔 叔孫氏、名は豹、魯の大夫。
稷 堯の時農師となる。
史佚 周の武王の時、太史尹佚。
周任 周の大夫。
臧文仲 魯の僖公の大夫。
ホーマー 希臘古代の詩人。

特色あり。中に史的の意義ありて、現代に認むるを難んずるは立德なり。現に立功家及び立言家の少からざるに、稱して立德家とすべきものを何處に見るか。立功及び立言は全く現實の事にし、過去にもあれば現在にもあり、將來にもあるべく、立德の漠然たるが如くならず。今は立德の形跡あるものも、立功と立言との孰れかに屬すべきが如し。三不朽の中、立德は人の欲求する所の絶頂にして、聖たり佛たるは人生の第一の快事なるかに考へらるれど、箒木の如く之を求めて遂に見失ふに終らん。現代の人の志す所は立功ならざれば立言なり。

魏の文帝
魏の曹丕。
ヴォルテール
佛國の歴史家
(西曆一六八九
四一七七八)

魏の文帝曰く、年壽有時而盡、榮樂止於其身。二者必至之常期、未若文章之無窮。是、文事に與る者の期せずして考へ及ぶ所に、筆は劍より強し。といふも其の旨相近し。ヴォルテール曰く、「功名心ある者にして悉く目的を達し得べくば、悉く文字の人とな

司馬相如
漢の詩人。
左思
晉の詩人。
杜少陵
唐の詩人。名は甫、字は子美、少陵は其の號。

るべし。と。ホーマーは傳明かならざれど、傳説に依れば、琴を携へて人の門前に立ち、且謠ひ且語れる者なりといふ。明を失ひしが上門附の如く、絃歌して錢を乞ひしものならば、苦痛なる生活を送りしなるべきに、後世之を歎美して已まず、彼の如くんば、死すことも可なりと考ふるもの常に之あり。凡そ苦心慘憺の甚だしきこと詩人の句を撰するがごときは少し。司馬相如の子虛賦、左思の三都賦、辭を練るに全力を用ひき。杜少陵が「爲人性癖耽佳句、語不驚人死不休」といへる、眞に實狀なり。幾多詩人中には、強ち人を驚かさんとせず、或は之を喜ばしめんとし、或は之を悲しましめんとし、或は之を別乾坤に導かんとするもあるべけれど、要するに皆多少目的を達する所に愉快を感じ、洛陽の紙價を貴くせる時、誠に大勝利を得たる如く悦びたるならん。己の以て絶佳とする所、人全く解せず、外に出でて衆に笑はれ、内に入りて米鹽に窮する時、若

人間知己少
村。佛山の詩句。佛山は明治初年の詩人。

賈誼

漢の文人。

蘇軾

宋の文人。東坡と號す。

マコーレー

英國の文章家。

カーライル

英國の歴史家。

フレデリック

英國の歴史家。

フロシヤ王

フレデリック二世。

（一七一）

（一七八）

（一七九）

（一八一）

し猶自ら信ずること篤くば、當世に屈して後世に伸ぶるあるを以て慰めたるべし。又實に當世に屈して後世に伸ぶるものあり。「人間知己少、破硯是良朋」といへるは、知己の少くして愈、得意を感じざるなり。

賈誼蘇軾の策論は正しく立言なり。世に論文と稱するは皆然り。論文といふも全篇悉く議論より成ることは限らず、或は議論を敘事の間に挿むあり、或は議論を挿まずして自然に主張たるあり。マコーレーの英國史は歴史にして自由主義を鼓吹し、カーライルのフレデリック傳は傳記にして人格の堅實を奨勵せるなり。東洋の史傳は皆多少主張あり。爲に史實を枉ぐこの非難あれど、史實を枉げずして主張するを得ずとは謂ふべからず。

形を異にして實を同じくするは詩と藝術、文と科學なり。「言は意を盡さず、文は言を盡さず」といへり。立言は即ち立意にして、凡

言は意を盡さず

書不盡言、言不盡意。

(易經)

ミケランゼ

ロー

伊國の美術家。

（一四七）

（一四五）

（一五四）

（一五七）

（一六〇）

（一六三）

（一六六）

（一六九）

（一七二）

（一七五）

（一七八）

（一八〇）

（一八二）

（一八四）

（一八六）

（一八九）

（一九一）

（一九四）

（一九六）

そ目的を達し得るものは、宜しく立言と見るべし。藝術家の製作に従事するは楽しきか、樂しからざるか。樂しくとも、世間の想像する所とは同じからじ。ミケランゼの工場に入りしものは彼の努力に驚かざるなし。夜更けて眠りしかと思へば、突然起きて頭に蠟燭を翳し、著手しつゝある製作に従事す。シスト禮拜堂の天井畫を完成せし時、絶えず仰ぎ居りしが爲に頸が曲らざりきといふ。上下に重んぜられて、生活も豊かなりしが、肉體の満足を事とせず、繪畫及び彫刻に汲々たりしは、苦心慘憺の間に漸く理想に近づく愉快の禁じ得ざるものありしに因りてなり。科學家は天地の美を讚歎せず。世間に美として讚歎する所も嚴密に分解し、眼中美もなく醜もなし。ダーウィンは自ら歎じて曰ふ、吾はシェイクスピアを讀みて少しも興味を感じず。初より感ぜざりしに非ず、生物の研究を専らにし、遂に之を感じざるに至りしなり。

アルキミデス
ス
希臘の數學家・哲學者
(西紀前二八
七―二二二)

アルキミデスは兵卒に襲はれし時、正に沙上に幾何學の圖を描き、一意研究しつゝあり。兵卒を顧みて曰ふ、暫く待て。問題を決せん。と言ひ終らずして殺さる。傳説にてはあれど、科學家の研究に専らなること往々此の如きものあり。眞に研究を念とするものは必ず別に樂しむ所あり、常人の樂しむ所と異なり。稱して樂しむといふべからずんば、他の何物にも代ふべからざる方針を取りて進みつゝありと謂ふべし。

英雄何必

清の鄭板橋の

大丈夫

後漢の馬援の

男兒當に

北齊の高昂の

「英雄何必讀書史。」とは單に東洋のみならず、何處にも言ひふるしたることなり。秦平無事の日には斯く考ふる者多からざれど、警報傳はりて多少世間の動搖する時には、風雲に際會すといふを事實にせんと欲し、曰く、大丈夫當に屍を馬革に裹むべし。曰く、男兒當に天下に横行して富貴を取るべし。出でては將入りては相若し之を併せ得ること困難ならば、せめて其の一を得るの愉快な

歷山

マケドニア王
(西紀前三五
六―三二三)

隅偶

るべきを思ひ、軍人たらんか、政治家たらんか、遠きは歷山、近きは奈破崙、人生れて彼の如くなるを得ば、萬死して憾なしとす。其の何が望まじきか、問へば、言ふまでもなく、天下を掌にし、事として意の如くならざるなきに在れど、彼等果して世人の想像するが如く愉快を感じたりしか。歷山は天真爛漫、直清徑行、一切の偽善を憎み、波斯に遠征して波斯の歡樂に耽りしに似たれど、彼は苟も無道さいふを敢てせず。當時の社會情態より考ふれば、身を律するの嚴なりしを認めざる能はず。彼の愉快を感ずるは富貴に在らず、無上の權を振ふに在り。歳三十にて歿し、能く彼の如きを致したるは偶然にあらず。奈破崙の幸福なるは十七歳までなり、といふものあるは、即ち爾後野心に驅られて東奔西走し、一日も心の安寧を得ざりしを指すなり。されど奈破崙の愉快を感ずるは、安樂の生活より寧ろ南征北伐の間に存せずや。肉體に苦痛あれど、己の

遠洋の孤島
セントヘレナ
を指す。

力を伸ばし得る處に満足を感じたるならん。彼は一種の理想に生き、之に近づくを以て満足せしもの、その羅馬を模範とし、世界地圖を改め、永遠の平和を計れる、實に時代を超越せる觀あり。衣囊にホーマーを置き、劍を以て世界を切り従へんこの抱負を遂行せんとし、胸中の悶々たる時には、涌くが如き智略とアルプスを抜く勇氣とに快感を覺えたるべく、遠洋の孤島に流さるゝや、居常鬱々たりとはいへ、自ら古來の英雄に比較して、満足を感じざるものゝ如し。彼は不可能を追求して、智囊を絞りし爲に、何の邊まで人智を働かし得るかを示し、英雄の古代に限らず、後世に古英雄を凌ぐものあるを證明せり。

青年の功名に急なるものは、政治家たらんことを希望するもの多し。何れの國にも法政の學を修むるもの多きは、官吏となり、銀行會社員となる外、比較的功名心を満たすべき門戸の開かれ居

ピット

英國の政治家

(一七五九—一八〇六)

カヴァール

伊國の政治家

(一八一〇—一八六一)

アウレリウス

羅馬の皇帝

(一八一—一八〇)

るが故なり。山高ければ麓廣し。高き位置あるが故に、麓に集まる者甚だ多し。されど高き位置に上れる政治家に何の快樂あるかといへば、世俗の所謂快樂を得ることは少し。後世に欽慕せらるゝ者は特に然り。奈破崙に對抗して英國の權威を維持せしウイリアム・ピットは、獨身にして、國家を以て妻とすを稱し、收入を擧げて政治の事に投じ、爲に負債山の如くなりき。伊國の建設に當り、獨り國政の整理に任せしカヴァールは、同じく國家を以て妻とすと稱せり。大いに富み大いに驕らずんば、高き位置を占むる効なしといふ者あれど、かゝる事に歡樂を求むる徒は、政界に飛ぶことも僅かに蝙蝠の飛ぶがごとし。大政治家の愉快は、我が施設の効顯れ、幾分にも國家社會の進善せんとするを見るに在り。古代には諸葛孔明の如き、マルクス・アウレリウスの如き傑出せるものありき。

倒斃

パリスン
佛國の陶工。
(一五〇九)
一五八九

器械の應用は近世に入りて加速度の進歩を遂げ、商業、工業、農業は之が爲に重きを加へ、嘗て立功家として軍人及び政治家を推したるもの、今は之に商業家、工業家、農業家等を加へざるべからざるに至れり。貧困は發明に必要ならず、富みて新工夫を運らししあり、貧困を忍びて成し遂げし事業の價値の少きもあれど、新發明、新工夫の記録は、半面より觀て貧困との闘争なり。パリスンの如きは一の極端なる例とすべし。實際に於て、勇者は世に益すること多きにもせよ、後人を感奮し努力せしむるは、一切を放擲して事に専らなるもの、傳記にして、事業としての直接利益の外、間接に人心に益する所多し。「彼も人、我も人、豈彼の如くなるを得ざらんや。」と後人の發憤するは、富貴にして歡樂に耽る所に在らず、己の爲すべきを信じ、斃れて後己まんとする所に在り。爲に人は往々立德の所に考へ及ぶ。

彷彿
|| 髣髴

帝王は一世の尊而も孔子の廟に跪き、釋迦の寺に跪き、耶蘇の寺に跪けり。個人の勢力にして最も廣く最も久しく影響の及ぶべきものを擧ぐれば、斯く帝王を跪かしむる立德家なりとすべく、隨つて志の大なる者の、以て人生の最大快事とするは之に彷彿たるに在り。されど、彼等がたごひ能く立德家の如くなるを得たりとて、果して愉快なるを得べきか。功名心の熾なるものは、後世に於ける勢力の孔子、釋迦、耶蘇の如くなるを欲しつゝ、現在に於て孔子、釋迦、耶蘇の如き不遇、又は不快なる生活を送るを欲せざるべし。もご立德は人生の美點を綜合して考へたるもの、人生の完成を以て衆徳を具ふるにありとし、暫く史的人物を藉りて之に充つるのみ。人生最上の目的は立德なりと雖も、立德家たらんには、如何にせば可なるかといへば、容易に解答を與へ難し。分け登る麓の路は多けれど、同じ高嶺の月を見る。立德は高嶺の月なり。而して

麓の路の最も主要なるものは、實に立言及び立功に在り。立言に種類あり、詩あり、文あり、藝術あり、科學あり。立功に種類あり、軍事あり、政治あり、商業あり、工業あり、農業あり。之を細分すれば頗る多數に上るべけれど、其の孰れかを念とし、十分にその能力を伸ばさば、幾許か立德たるを得ん。

高山の絶頂は寒冷にして風強く、久しく居るに堪へず。而も健脚なる者は、麓にありて百花の咲き亂るゝを觀て満足せず、必ず蒼空を凌がん事を期す。歡樂は麓にあり、安樂は麓にあり、日常の愉快は悉く麓にあり。されど他人より身體の強健にして女兒の樂しむ所の外に出でざるは、聊か物足らず覺ゆべく、時に餓を忍び、寒に堪へ、絶頂に至りて千里一望の快を恣にせんぞす。或はアルプを低しとし、全く人跡絶えたるヒマラヤ山に登らんぞ企つ。而して若し幸にその上に立たんか、千古の氷雪萬里に互るを見て、壯絶

蒼空
碧落

快絶壯絶々を叫ばん。女兒も之を聞いて地球の最高處に立つの如何に愉快なるかを想像し、唯己の企て及ばざるを歎ぜん。蓋し形而下の快事は多數の求むる所にして、形而上の快事は少數の求むる所なり。而も求むるに求めざるの差こそあれ、形而上の快事を以て人生の最大快事なりと認むるは、世間一般に通じて動かすべからざる所の事實なり。(日本及日本人)

後篇

擬古文抄

佐々政一

京都の人、國文學者、大正六年歿、年四十六。

荷田春滿

京都船荷山の祠官、國學の大家、一〇二〇年(約二〇六十九)歿、年六十九。

田安侯

田安宗武、徳川吉宗の第三子、國典に通じ和歌を善くせり。

擬古文に就いて

佐々政一

江戸文藝の興隆に一大勢力を加へたものは賀茂真淵である、真淵によつて勃興された古學派の歌文である。

真淵は荷田春滿の遺志を繼いで、謂はゆる國學の研究に従事し、古學の復興を唱へて、萬葉考を初め斯の道に關する許多の著述を成した。身は江戸の田安侯に仕へること十五年、弟子益、多く、名聲愈、高きを致したが、六十四歳といふに、致仕して縣居に閑居したのであつた。

真淵の主張するところは、漢學や佛教の影響を蒙らない時代に復るといふにあつて、衣食住を初として、一切を古に擬せんとさへ企てた。さもあれ、それは到底行はるべき事ではないので、實際はその和歌と文章との復古に止つたのである。かつ真淵の才は、研究によつて古道を明かにするといふよりも、寧ろ歌文の創作に長じてゐた。故に自然そ

擬古文に就いて

の門人にも學者よりも歌人の方が遙かに多かつた。

真淵が擬古の歌文は實に稀世の作であつて、千年以前の言語を運用して毫も澁滞の痕がない。併しそれは古語を以て新思想を咏じようと企てたものではなくて、その思想をも古に復すことが、主張の随一であつた爲に、斯く自在なることを得たのであらう。それにしても萬葉以降全く絶えてゐた長歌を復興し、從來隨筆や物語の外には全く用ひられなかつた文體で、新に支那人の小品文などに比すべき文藝上の創作たる雅文を創めたと共に、我が文學界に幾多の優美な、或は蒼古な言語を復活せしめて、一般文藝の詞藻を豊富にし高尙にした偉績は、これを認めねばならぬ。たゞ萬葉調の和歌や、源氏流の雅文は、彼一派の文學で、一般社會の時代思潮に切實ではなかつたが、併し又その復古的思潮は、當時の時代思潮中に一流域を占めてゐたもので、その影響も亦尠しとはいはれない。彼の歌文集には、賀茂翁家集、縣居歌集がある。

真淵の門下中文藝上に盛名のあつたのは、村田春海と加藤千蔭とを以て随一とする。春海は漢文に長じ、その豊麗なる格調に倣つて、開闢

手柄岡持

小説家、明誠堂喜三の狂歌師として、名平澤常富、文化十年、七十九、蜀山人、狂歌師太田南、敵のこと、又、四方赤良と、いふ、年七十六、五年、歿、文政七、十六

起伏の自在を極め、真淵の長歌と共にこの派の代表的作品といはれてゐる。琴後集がその歌文集である。千蔭の盛名は春海に遜らない。彼は手柄岡持や蜀山人等とも親しく、橘八衢といふ名で狂歌をも作り、黄表紙などにも趣味を持つてゐて、一面當代の洒落な思潮にも觸れてゐたから、文章も輕妙な趣を具へてゐるが、動もすると莊重を缺くの虞がある。家集には、朮が花がある。この二人の文章和歌は、既に、真淵の如く強ひて高古ならんとはせず、和歌には古今集以後の調が頗る多い。この他、當時にあつて雅文に名を得たものには、京都の伴蒿蹊、春海の門人清水濱臣、本居門下の藤井高尙などがあつた。蒿蹊の閑田文章、閑田耕筆、閑田次筆、濱臣の泊酒舍集、泊酒文藻、高尙の松の舍文集、松の落葉等は、皆見るに足るべきものである。

もしそれ本居宣長は實に近世に傑出したる一偉人であつて、單に眞淵門下の雅文家として見るべきではない。その鈴屋集の歌文の如きは、たゞ研學の餘業に過ぎぬ。彼は數多き復古派の學者中、唯一人の眞に學者らしい學者であつた。(近世國文學史による)

村田春郷

眞淵門下の歌人。村田春海の兄なり。家産を春海に譲り、閑居して和五年（約一六〇年前）歿、年三十。

ふるびにたるかな家持が集にや入れましとて人々笑ふ。

（卷之五―岡部日記）

一 村田春郷墓碑

玉川にうまし玉あり。人得がてにす。世の中に人あり。うまし人、また少し。こゝに、氏は村田、名は春郷といふ人あり。其のさが高くしてへりくだり、おもひがねなごやかなり。そが常はや、遠つ祖をまつるに、齋串のみてぐらをそなへ、春秋の花をつくし、父母に仕ふるに、やごりのつくゑ物を捧げ、朝夕のうるはしみをなせごも、すべてたらはぬ事を恐れ、うからやからにうるはしく、友垣にうるはし。家人けだし百たりに近し。事あるに及べど、見直しいひなほす神つならはしもてすれば、家人もうつしき青人草に習はず、ごゝのひなごびにたり。好めることは、古への書をよみ、古へぶりの歌をよくす。殊に長歌を得たり。又鞠蹴る業を得て、其の姿う

るはしく、立居みやびかなり。其のわざ好める人、皆世に優れたりといへり。しかはあれど、うま人の召ある時は、故をまをしてまゐらず。さは、業もて名を成さんことを恥ぢてなり。かれ曾祖父忠之、佛の法に入り、祖父忠友、聖の教をたふごみ、父春道、神の道を傳へ、春郷、古へのみやびを得て、今に四世つぎ世にたゝへられたり。ここに於て春郷思へらく、われ市の邊りに居て、世々富めり。富はやがて浮べる雲なり。移ろふ様なにか定まらん。今務むべき時なりとて、市の外のなりごころに移ろひて、なりはひを永くせん事を謀り、父母にこひ老人に謀りて、もろくうづなひて後、遠つ祖をまつり、かたやきして定めぬ。其の深き思ひはかりある事かくのごとし。時に、明和の五ごせ皐月、病ありて長月までおこたらず。三十の齡にして身まかりぬ。をちこち人皆いへらく、うまし玉こゝにしてしづきぬご。悲しきかも、此の人。惜しきかも、其の玉。あ

はれ。いろご春海泣きていへらくいにし人子なし。たゞ言の葉の残れるあり。名代となすべし。その常のありさまをば翁が古言をもて記さん事をこそいへり。かれ賀茂真淵むつまじき友垣の故をもて、涙にひぢて記す。(卷之四)

うけらが花

加藤千蔭

一 泊酒舎にて蓮を見る辭

大比叡うつされたる上野の岡の麓、比良の大わだなせる池水の畔に、さゞなみや、滋賀さゞれ浪もて名をおほせたる屋あり。白妙の富士のみ雪も消え、あらがねの土さへ裂くといふなる頃、人皆涼みせんこて其の宿りに集ひて、高き屋に登りて見渡せば、池の面は紅のゆはたご見ゆるぞ、蓮の花の咲き満ちたるにてはありける。

加藤千蔭 もと江戸の與力、姓は橘、芳官、又は賀茂、真淵に學び、文化五年(約一八〇年)歿、著は外傳、萬葉集略解、けらが花七卷なり。

あゝ海

見ゆ

生ひ立てる葉の廣かたりたるは、宮路ゆくうま人の衣笠の如く、浮きたるは、大庭に百の官のわらふだ敷き並べたる如く、葉に置ける露は、白玉の五百箇つごひを解き亂したるになん似たりける。池の水清らに澄みて、遊ぶいろくづ思ふここなげなり。人々衣の紐を解きさけ、おばしまに倚り居て酒汲みかはす程、彼の岡の木高かる瑞枝吹き越す風の涼しきに、えならぬ香の薰り來るも、たごしへなしや。彼方の岸より中島まで、長き堤を築きて、石もて作れる橋かけ渡せるは、唐土の西の湖さかいふめる處の様かけるかたに似通ひて、遙かに行きかふ人の袖の匂さへ懐かしく見ゆ。あるじは、我



加藤千蔭

西の湖 支那浙江省に在る西湖。

うけらが花

日の入る國
印度を指す。

が國ぶりの歌つくり書見ることをしも好めるが上に、こゝ國の書をさへに朝夕の友とせりければ、さる方の友垣にしも乏しからず。唐歌好める何がしの博士は、さにぬりの小舟に唐をこめ載せて、此の花折らせまく思ひ、日の入る國のますらをの法に心を寄するは、これぞこの上の品のうてなに生れ出でたらん心地するなご言ひあへりけり。人々、心々に歌によび出づれば、もたもたもたもたならず。

なべて世のにごりにそまで住む人の
友と見るべき花ぞこのはな

かくて、上野の岡の入相の鐘木の間しのぎて響きわたれば、み盛り
りに開けたりし花の、又ふ、めるさまに立返りたるも、あはれ深かるものから、をちかたの梢の驚すら、搦求むるものをとて、人々、あがれ歸りぬ。(巻七)

二 蟲選の詞

秋のあはれは蟲の音ばかりなるぞなき。いで武藏野の原にし
もき、てん家づこにもし、なんこて、葉月の廿日ばかり、白妙の袖、ふりば、へぬば玉の駒なめつ、なんゆきゆく。ふぐし持たるをこめに問へば、こ、なん武藏野の原なりといふ。かぎりも知らぬあさび生のうへに、たゞ富士のねのみぞいちじるき。かくて見わたせば、ゆふべの霧はもの、ふの小手指原にたち、入る日の影は赤駒の足柄山にかくろひぬ。やがて野づかさにおりたちつ、ついで松ふきたてて、さかなまうぼり汲みかはすほごに、月はるく、澄みのぼれば、おける露原みな玉をしきなせり。この野のさまは、人のかたれるよりも、かぎりにかぎりなく、鳴く蟲のこゑは都にて聞きつるよりもいごこにて、ますらををと思へる人々からも、えたへぬなげきをなんしける。うけらかるかやはぎす、き分けにわけて、をちもこのももあさるま、に、千々のむしはかずくの籠にもみちにした

うけらが花

かげにをり
喉もとほろ

小手指原
武藏國入間郡
にあり。今所
澤の西一里。
足柄山
相模國足柄上
郡にあり。

よこつ
やう
ののみ
ほろ

り。そも／＼こさ狭きつぼのうちの草むらにきゝて、秋のおもひ
をやらんよりも、かく大野の心もひろに出でたゝんこそ、まことに
ますらをの遊なりけれ。かくしつゝ、秋てふ秋はさひ來たらんこ、
野守のをぢにいひて、うちつれて歸りぬ。

むらさきの根はふ萱原いりみだれ

秋なくむしのこゑを聞くかな(卷七)

三 隅田川の秋雨

葉月二十日あまり、秋のけはひの懐かしくて、例の隅田川のほと
り、石濱の庵に往きて宿りぬ。有明の月のにほひも、霧たち渡る曉

宿の
深
はらわたる
の
白
き
霧
を
か
き
ぬ
る
光
景

江戸のむらさき

京紅

二二頁つしまつた

石濱
今の東京淺草
山谷堀附近

筆蹟

嶺上雲深
立登る雲より
おおくに音する
ははこねの海
のきしの白な
み千蔭

十五夜 望月

十六夜 イサヨヒ

十七夜 立待の月

十八夜 居待の月

十九夜 寝待の月

二十夜 取待の月

二十一夜 有明の月

秩父の山

武蔵國秩父郡
なる連峰の總
稱。三峰・武甲
山など最も高
し。

昔 現代 反目
みなり 川に

澤標 枕標 飛標

のさまも所がら世に似ぬものから、こゝは雨のそぼふる日なん殊
にあはれは深かりける。もごより萱ふける庵なれば、音だになく
て、軒の雫の三つ四つ落ちそむるより、籬の萩の下葉の色づきたる
が、ほろ／＼と散るもあはれなり。水の面は動くともなくて鏡の
如くなるに、雲のこきうすきうつろひて、かつ浮びかつ消ゆるみな
わにこそ、雨のけはひはしるかりけれ。みをの一筋は、さしひく汐
にも交らで、さには縹の色に流れいにて沖に出づめり。これや水
上の秩父の山の眞清水のおちくるならん。うち向ふ岸のはり原
のみ濃き墨がきの如くなるが中に、柞の黄ばみたるはさすがにほ
のかに見えて、そのひま／＼より長き堤の見え渡るに、堤のをちな
る梢は、やう／＼に薄墨もて書きけちたらん如く、いとしも遙けき
は、たゞ靡かぬ煙ごのみぞ見ゆる。こゝかしこより鴉の飛びゆき
つゝ、時の鷺の翼重げにおき出でて、河の瀬の眞菰におり立てば、み
うけらが花

さごの群れきて水の面に浮べるもをかし。上つ瀬より筏師の蓑笠きて棹を筏の上に横たへ、おのれたむだきて思ふ事なげにてをり、筏は水のまに〜流れゆくも静けし。渡守舟さし出せば、大笠傾けて渡りゆく人の、やがて堤を歩くさまも繪によく似たり。凡て一日のうちに、筑波嶺より吹きおろすかと思へば、沖よりも風通ひきて、岸の木立も、長き堤も、あるは現れ、あるは隠れて、限りなき青海原に向ひたらんやうに覺ゆる折もありけり。かくてや、夕暮近くなりゆけば、群鳥のおのがじし時のごむるに、雁の一つら二つら渡りゆくなど、えもいはん方なし。暮れ果てても、猶ゆく水の色のみ遠白く残りて、河ぞひ小田にいはいはるみくまりの神の御火の、海人のいさり火ごもいふべく、幽かに見え渡るもあはれなり。

秋ふけて小雨そぼふる隅田川
 たが墨がきのすさびなるらん

四 山里の月

耳に鳴り弭の音を聞かず、目に旗手の靡きをしも見ぬおほん時世に遭ひては、何事につけても、憂しと詫びしと怨みかこつべき事やはある。されば世を避くこしもあらねど、あきじこる市の巷に近き賑は、しさを厭ひて、この山里には移ろひ住めるになんありける。秋こそ殊にこいへるも宜なるかな。籬の下にたゝずめる小鹿、松に木づたふまじらの聲も、獨りある人を慰むるに似てあはれなるに、茜さす日も入りはて、柚人の斧の響絶えて、端山のかひより月さし上れば、そがひの峯より落つる瀧つ瀬は、黄金の色の絲引きはへたらん如く、岩に碎くる水は、白玉をこき散らすかごぞ疑はる。ここしへに清らにして物に滞ることなきを我が心とばせんと思ふに、たぐへてんものはなぞ。たゞ月と瀧つ瀬とのみ。(巻七)

うけらが花

同行かた

かた
かた
かた

秋こそ殊に
 山里は秋こそ
 殊にわびしけ
 れ鹿の鳴く音
 つに目をさまし
 王生忠集

春
何

花柳をい

村田春海

江戸の豪商の家に生る。姓、錦稱平四郎、通稱平四郎、眞淵の門人なり。漢を兼ね、博識を以て知られ、又江戸第一の能文家と稱せらる。文化八年(約一八〇八年)歿。書二十六種、琴後集はその歌文を集めたもの、十五卷あり。

父 村田春道

今年 文化七年。

琴後集

村田春海

一 琴後集序

昔、父の世にいますかりし時は、遊びの道に、深う心よせたまへりしまゝに、吹きもの弾きもの、なにくれの器ども家に數多傳へたるを、さしごろ度々の火にあひて、今は多く失せもてゆきて、たゞ、あづま一つなん、これをのみ昔しのぶるくさはひには思ひたる。今年草の庵を改めつくりて、小さき伏屋を、己がつねに住みならさん所と定むるにつけて、思ひけるは、かのあづまこそ己が家の寶なれ。いかで、これに所得させて、そのかたはらにこそ起きふしすべけれ。



村田春海

絲なきを 晋の陶潛が無絃の琴を弄びしことをいふ。晋書陶潛傳に「性不愛音、而音素琴一張、絃徽不具、每無酒之魚、則撫而弄之、曰、何勞三絃上聲。」

われ琴ひくことはならはねど、絲なきをまさぐりて思をやりしためしもあれば、さて、これをわがかたらひ人にて、さて、こゝがみに硯一つ、火とり一つ、こゝじりに厨子一よろひをすゑて、年頃の言の葉どもを入れたり。
このごろ、おのが心しりの人々、詣來ていひけらく、年頃の言の葉まへる言の葉どもは、いかにしたまふぞ。かきあつめたまはんに、は、われら筆たすけまゐらせん。といふ。「そは嬉しきことなり。さるは拙き言の葉を、人なみに世に残し侍らんことは、はづかしきわざには侍れど、あまたとし、思を寄せ心をこめしものを、いたづらになしはて侍らんはほいなし。こもかくも然るべからんやうに、ごりなし給はんこそうれしけれ。こたへければ、人々、かの厨子より、さうで、かきあつめもてゆく。さて、名をばいかに。といふ。すなはち、琴後とこそいふべけれ。さて、その巻のはしつかたにぞ書きつ

琴後集

一七

泊酒舎
春海の門人清
水濱臣の居

けさせたる。(序文)

二 泊酒舎の記

上野の岡の麓に池あり。この池の西なる方を萱が町とぞいひける。こゝに蘆原刈りそけて、つい建てたる伏屋あり。そはたゞにその池に臨みたれば、名を泊酒舎となんいふなる。

そもく霞たなびく春のあしたは、むかつをの梢をうつして、花

あはれ世のなほ、おほいしきものなり
あはれ世のなほ、おほいしきものなり

の鏡にむかひ雁鳴きわたる秋の夕べは、雲間の影をうかべて、月の御船をこぎめ、あるは蓮花咲く夏の日、あるはみ雪降る冬の夜、折につけ時に随ひて、見る目のあはれなん盡きざりける。あるじは深

筆蹟
かはしまによ
るかたとすれば
たぢかへるち
どりやなみち
おもふぢなと
春海

あるじ
清水濱臣。

くみやび好める人にて、四つの時のあはれをすぐさず、こを古さまの言の葉にのべて思をやり、又唐土風のしらべに習ひて、心をしも慰めけり。かれたまあへる人々、花にあくがれ月にたどるも常にこの伏屋をなん訪ひ來にける。

一日あるじのいひけらく、世を経て絶えざるものは鳥の跡なり。いでこの屋の樂しみを、人々ごあひ睦ばへる心をも、長くうみの子のつぎに傳へて、わが名代とせん。ここのゆるよし記してよ。ごあれば、即ち筆さしぬらして、聊か物のはしに書きつく。寛政といふ年の七とせかな月。(卷十)

三 知足庵の記

あはれ世のなほ、おほいしきものはあなれ。高きいやしき品いと異なりといへども、おのがじし心ゆくばかりなるは稀に

林にやどる
鶴鷄集 深林、
不_レ過_二一枝_一、
便_レ鼠飲_レ河_一不_レ
マ_レ過_二滿腹_一、
マ_レ追_二遙遊_一、
莊

梅尾の昔を
建久二年、僧
榮西が宋より
歸朝せし時茶
の實を持ち來
つてこれを山
城國梅尾の明
惠上人に贈
る。上人喜び
て、その種を
深瀬の園に植
ゑたり。これ
我が國の茶の
はじまりな
りといふ。
いにしへ人
知_レ足_レ者_一富
三章
(老子第三十

て、唯足らばぬ事のみぞ多かりける。花を思ふことは梢の嵐を恨み、月をめぐらばぬことは尾上の雲をいさふためし、誰かはのがるべき。林にやどる鶴鷄は、僅かなるさ枝のかげをのみたのみ、流に水もこむる鼠は、たゞ腹ふくるゝに過ぎず。ここそ古人もいひつれ。かゝるこそわりをだに分たば、限あるこの世に、限なきことを思ふべきかは。

茲に中村のぬしなん、よく塵の世のけがしきをのがれて、萱の軒、松の樞に心の月をすましめ、花をつむ夕、闕伽をくむ曉、御佛につかふる暇ある時は、氷をくだき雪を煮て、梅尾の昔をしのぶめるわざにしも、心をなん慰めける。これやこの世に求むべきすぢをも忘れ、又人を羨むべきふしをも思はで、己が心から事足るわざにしもあれば、彼のいにしへ人のいひけんこそわりこそかなはめ。いでや、うつせみの世の限なき求ある際とは、日を並べてあげつらふ

べくもあらざりけり。うべなく、この住家をしも、足ることを知ることは名づけしこと。(卷十)

四 睦月ばかり山笠人の許へ

年改りては何事かおはすらん。春の日數もまだ淺きに、岡邊の下もえは、今しも御袖にたまるばかりも、摘みそめ給ひつや。谷の戸の初音は、いつよりか御あさいの枕をば驚かしまゐらせたる、いごなんゆかしき。こゝにはこそぞの雪のなごりにや、風のけしきも冬めきて、猶かすみもやらねば、巷の柳のうちけぶりゆかん程も、心もこなう見え侍り。さるは一年籬のもこに移し植ゑ給へるしも、雪のうちよりも、いち早くゑみ榮ゆごなんのたまはせし。この頃こそ心ここにも匂ひ出で侍らめ。いかで一枝をこそ思ひ侍るを、ゆるし給はましかば、いごうれしうなん。

しる人の
君ならで誰に
か見せむ梅の
花色をも香を
もしる人ぞし
る(古今集、紀
友則)

芳宜園大人
加藤千蔭のこ
と。

九月八日
千蔭の歿せる
はこの月の二
日なり。

縣居の庭
賀茂眞淵の
門。

しる人のたぐひならねど梅の花
色香をわれに惜しまずもがな(卷十三)

五 祭芳宜園大人墓文

こゝに文化の五とせ九月八日謹みて、芳宜園の大人のおくつき
の御前に、菊の初花一枝をたむけ、香の木一片を焼きて、うなねつき
て申さく、あはれ哀しきかも、君は我に十といひて一とせのこのか
みにおはすなるが、今そのかみを想ひ出づるに、君はまさになさかり
の齢におはして、我はまだ童にてぞ侍りける。常に縣居の庭に物
學びにゆきかひたる時、朝にまゐることは、君のみはかしのしりへ
に従ひ、夕にまかることは、君の御袖のもこにすがりて、相うるはし
みまつれること、親子はらからにも何か異ならん。書讀むことは、
君を師とも尊み、歌作ること、我を弟のつらにぞ訓へ給ひける。

くひぜを守

宋人有耕田者、田中有株、兔走觸之、折頸而死、因釋其耒而守株、韓非子云、舟にさだつたる

琴後集

二二三

中頃にして、君は仕への道にいとなくおはし、我は世のさかにか
づらひて、自ら疎き方にも過ぎつるを、君仕へをしぞき給ひて後は、
我も同じちまたに移り住めば、花を尋ぬことは、われ道しるべをな
し、月をおもふことは、君が舟にあひ乗り、うき事も俱に憂へ、嬉しき
ふしも俱に喜びて、世にありふるわざのまめごともあだごとも、か
たみに隔てなく心をかはせること、今に二十年、そのはじめをくり
かへし數ふれば、相友たること、既に五十とせにぞあまりける。さ
るを、今おくれ奉りて、いつの世にかあひ見ん、いづれの時にかこと
ごはん。常なきは人の身のならひぞご知るも、これを如何でか嘆
かざらん、かゝるを誰かはよく堪へん。あはれ哀しきかも。文の
林世々に衰へ、言の葉の道日々にくだりゆけるを、賀茂の翁世に出
でて、今をすてて古にかへり、青雲の高き心しらひをもごめ、倭文機
のあやあるみやびごをたふごみいへれど、くひぜを守り、舟にさ

藤原 持統・文武兩帝の朝
 寧樂 元明帝より光仁帝までの七代の御代
 堀河・鳥羽の御時 堀河帝の朝に堀河太皇太后百首に堀河次郎朝首に堀河次郎百首は平安朝の歌の絶頂の朝頃以後に下なるべし

だつくることもがら、彼になづみこゝにひかれて、なほあやしみ咎むるたぐひは多く、たまあひてよくうけひく人なん稀なりしを、君ひさり心をおこして、あまねくさとし、ひろく誘ひしより、近き人はまのあたり相うづなひ、遠き人は遙かになびき來て、いにしへぶりの歌、世にさかりになりたるは、まことに君の力によりてなり。その自らよみ出でたまへる歌を見るに、古き調、新しき姿、ごりぐに具はらざるはなし。その古をうつせるは、藤原寧樂の御世に及び、後のたくみにならへるは、堀河・鳥羽の御時にくだらず。心におもふことは、口につくさざることもなく、目に觸るゝものは、詞にのせざることなんあらざりける。これを見て、高きもみじかきも、めでたふごまざる人なし。又、ごごのみの人は、その名を君に知られては、身のおもておこしと思ひて、世にもほこり、君のひごうたを得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ、深くよろこびける。然るを今

清水濱臣 江戸の人、世に醫を業とす。通稱文長、泊酒舎と號す。村田春海の門人なり。長門に名筆一、世に歌文に長じ、高名、權門に貴族、延いて政待せり。約一〇七四年(約一〇七四年)歿す。著書十數種、泊酒文集はその一なり。

山上の國つかさ 山上、憶良のこ。聖武天皇の朝、筑前守と。五年、天平七年、萬葉集に多づく。

こがねの聲、忽ちやみて、玉のひゞき復び聞えずなりぬるは、わがごちのなげきのみかは、大かたの世人のうれひごもいひつべし。これをいかでか惜しまざらんか、るを誰かは慕はざらん。あはれかなしきかも。わがかくごごあげするを、泉の下にもさやかに聞しめし、天がけりてもはるかにみそなはせごなん申す。(卷十五)

泊酒文藻

清水濱臣

一 萩をめづる詞

木の花は春に匂をつくし、草の花は秋を時とすれば、誰もみな春は山邊をこめ、秋は野路にあくがるゝをこそ遊の道の常とすれ。抑、花野の秋に咲きみだるゝ千草は、ごをはたみそよそ、その數多かめれご、これはしもご取りいでて愛で玩ぶべきは、かの山上の國

泊酒文藻

七種 秋の野に咲き
びる花を七種
ふれば七種の
萩が花尾花葛
花撫子の花女
郎花また藤袴
朝顔の花(萬
葉集) 山上憶
もろこし人
も云々
女郎花の異名
を支那にて敗
醬といふを指
す。

秋とはいは
ん 人皆は萩を秋
といふよし昔
は花がうれ
を秋とはいは
ん(萬葉集)

つかさのよみおかれたる七種になん盡きぬべき。そが中にもま
た勝れたるは何れぞか定めん。女郎花はいごなまめかしく懐か
しげなれど、唐人もなにがしごか其の名をよびておとしめたるも
こごわり、花の盛りなる程こそあれ、はてはうたてあやしき香
のそひて、花瓶に入りたるなごりなごもあさましきまでに、鼻さへ
打覆はるゝや。撫子は唐にやまごに色を交へてうるはしくあて
なれど、常夏にうつろはずして、秋にまで咲きかゝれるが飽きたる
方もあるべし。

朝顔はいごらうたし。朝ごごに色改むるなご心地清げなれど、
これはまた見る程もなく萎れ渡りて、露のひるまをだに待たぬが
事足らぬ心地す。葛は風のまに〜吹返す葉末のうら珍しきこ
そあれど、はひ廣ごりもうるさく、藤袴は句のいひしらぬはさるも
のから、見立てなき花のさまならずや。尾花ぞ古き歌にも、秋とは

いはん。詠みたれば、あるが中にも優りたるやうなれど、廣き野末
にめぢの限り高やかにさし靡きたるは、白妙の袖もあやまたれ
て心ごまる心地すれど、二も三もごが處せきつぼの内なごに生
ひ立てらんは、何のをかしきふしかあらん。

いでや、萩の花を見よ。秋の初風やう〜身にしみ渡る程より、
かつ〜咲きそめて、或はなだたる大野ら、或は程なき前裁、多くも
少くも、やごごなき御垣の下にも限らず、葎はふ賤がはひりをもき
らはず、處えて句ふさま懐かしくはためたきに非ずや。さらば
七種の内にも優るべく、千草の中にも勝れたるは、此の花をさしお
きてまた何れぞかいはん。(卷二)

二 擣衣を聞く

近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむ

秋月
系 擣衣

も亦しきる。雁がねの聲の擣衣をさそふにやあらん、擣衣の音の雁がねをさそふにやあらん。あなあやし、あなあやし。そもこの音の悲しきか、住む里のさびしきか、擣つをりのうきゆるか。皆あらず、聞く人の心のわびしきなり。(卷二)

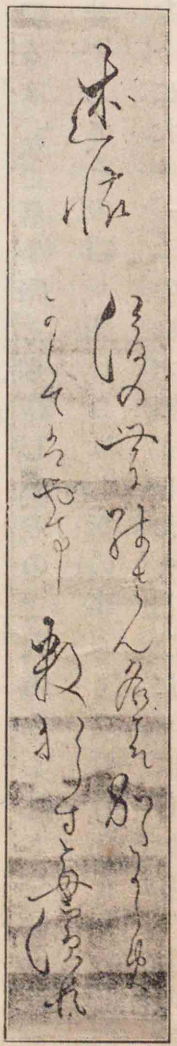
縣居翁

賀茂真淵。

三 縣居翁の墓參會に

おのれ人に異なる一つの癖ありて、常に夢みる事をおもしろみ、夢みる事を樂しむ。しかはあれど、よき夢見たりとて人に誇り語らんとも思はず、悪しき夢見しとて夢にあらはせて物にかへうつさんともせず。おもしろむしるしにやぬる夜として夢見ぬ夜なく、樂しむからにや、はかなき事らもよく心の底に覺えて忘れず。如何なればおもしろく、如何なれば樂しきぞこいふに夢といふものは思ふ心より見るこはいへど、いとゆくりなき事をのみ見て思

はぬ野山にもさまよひ、知らぬ昔人ともむつ物語し、或はをかしき事、或はおそろしき事、或は苦しき事、昔かと思へば今、今かと思へばむかし、げにうつなきものになんある。さはいへ、夢といふもの絶えてなからましかば、夜はたゞ徒らにいねたるのみにして、死せるに等しかりなまし。よしやはかなき夢心地にもせよ、是を見て



筆蹟
後述懐
の世に
残さ
ん名
か
ら
め
か
く
て
は
や
ま
じ
敷
な
ら
ず
と
も
濱
臣

忘れず、是を見て樂しまば、いねし程も起きゐたらん心地して、五十年の命も百年の齡に思ひ比べられぬべし。徒らに死せるが如きに勝らじやは。己が夢好みは、この思ふ心ありての事なりけり。まことや、いにし世を偲び、過ぎゆける昔を思ひ出づれば、すべて何かは夢ならぬ。悔しく過ぎし昔語は、取返さんにもよしなく、語

錦織の屋
村田春海
芳宜園
加藤千蔭

この御寺
品川東海寺

り出でんもやくなき事ながら己いど若くて二十に三つ四つたらぬ程より錦織の屋のあやなる手振に思ひをかけ芳宜園の色なる言の葉を心に染めて晨夕に馴れ睦び聞えて古事學の事ら問ひものしたるに二人の大人だち常にともすれば縣居の翁の世にいまそかりし折の事うち語り聞かせられてよろづたゞ夢のやうに覺ゆるは。なご慕ひ聞えられしがその二人のうし達も今は世におはせずしてその語り聞かされし折の事らもまた五年十年の昔語となりたり。おのれ才拙く心たましひたゞはしからで學の常に愚なれども幸に二人の大人だちになれ親しみて翁の昔語を聞けり。その翁の昔語を耳に留め二人の大人だちの世にいまそかりし晨夕を目に忘れずしあれば翁のごありし節二人の大人だちのかかりしすさみを事に觸れては思ひ出でてかつ慕ひかつ懐かしむ。これ亦面白く樂しき夢物語ならずや。あはれ今この御寺に、

とあり
かあり
しあり

明の力の
美人も
大層り
人々
大層り
大層り

翁のおくつき詣するも年毎の恒例のやうになりて十年あまり四年にもなりぬ。星移り月變らば今も亦後の世の夢物語となりなまし。今年も例の人々と共にこのおくつき詣すこて豫めこごがきを設けていにし事らは夢の如くなり。こいふ事を歌や言葉やこ人もよみ吾も作らんとするに始めにいへる己が夢好みの癖思ひよそへられてはかなきそゞろ事しも言ひ續けられたるなりけり。山寺のこけのむしろに旅ねして
ふりし世しのぶ夢がたりせん (卷三)

わが師は文詞なども筆とられてより幾度か稿をかへてなほ心におちぬぬほどはそのまゝ厨子のうちに巻き入れおかれて心のおもむける折とう出ては消し補ひなどせられしこと常なり。されば自ら許して清書せらるゝに及びては誤れることはをさゝなかりしなり。

(清水濱臣)

伴 蒿蹊

近江八幡の人、名は資芳、京に出でて有賀長伯・武者小路實岳に學ぶ。遂に一家を以て、歌文を以て一時に鳴る。殊に和歌は所謂平安四天王の一人たり。京の大夫に佛の邊に住みて、閑田廬といひ、自ら閑田子と云へり。文化三年(約一〇〇〇年)歿す。著は閑田近世時人傳・閑田次筆等十數種あり。閑田の文章五卷はそ

某の卿

武者小路實岳。蒿蹊の和歌の師

閑田文章

伴 蒿蹊

一 情は新しきをもて先こそす

歌の詠みざまは、中昔よりこなた賢き人々の教餘りなければ、拙きおのれ今更に何をか言はん。されど唯一つの思ふ事は、情は新しきをもて先こそすといふなり。ぬしう心得ば、道なき所に道を求め、うばらからたちにかゝりて、手足を傷ふべし。凡そ喜び悲しびの時に當り、花に月に對ふをりく、又題の歌も、ひとしくまごころに思ふ所を打出づるは、新ならんご構へざれども、おのづからに新なる趣出で來べし。おのれまだ若かりし時、某の卿に従ひ侍りしに、卿教へ給はく、何にまれ得たる題を心にしめて案じめぐらす時、人に誤はず、己が誠より詠み出でなば、たごひ吉野の花を雲と見龍

又八人ナリ
及蹊
閑田廬
閑田子
閑田

序	同
和詞	八
	五

木の芽はるさめ

田の紅葉を錦といはんも新しきなり。と仰せられしは、年月を経ていよ、味あるを覚えぬ。固よりよきあしきけぢめは、おのれおのれが才不才によるものから、生れながらに知る人はあらしなれば、古を師として、心はすがすがしく直く、言はけだかく正しきをならふべし。かくてぞ姿も苦しげなくのびらかなるべき。見聞につけて心は移るものなれば、巧に新しきをむねとし、詞はた曲げかざりて興を求め、我賢しと構ふるには、ゆめ倣ふべからず。

一一 冬のこころ

花咲き實なりし木も紅葉を限りに冬がれ、木の芽はるさめも時雨にかはり、それも何時しか染めぬべきものなくなりぬれば、みぞれにうつりて雪と積る。一とせの月日は隙行く駒の程もなきかな。振分髪こまかみのうなる子が大人おとなしくなりぬと言はれしなんやがて

閑田文章

自然は飛躍せず程原論(カールビン) 自然は飛躍す(カールスの唯物主観にも)

國語讀本 卷九

三四

Nature makes no leaps

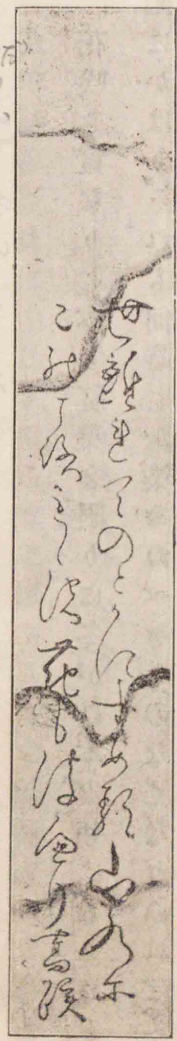
筆蹟
世離れての
かにすめる山
水にこのころ
もこの花も浮
へり 蒿蹊

少壯いくば
く時ぞ
歡樂極兮哀
情多 少壯幾
時兮 奈老
何 漢武帝
秋風辭

前の車の
公衆不仁曰
覆後車戒説
死

雪を集め
晋の孫康が雪
を集めて書を
讀みし故事
老いては

丈夫爲志窮
當益壯(後
漢書馬援傳)



老の始にて終に髭髮の白くなりぬるをしもつくくと思ひ比べ
て埋火のもとのみうづくまるを若き人々はさこそ見苦しと思
ふらめ。我もまたしかぞありし。少壯いくばく時ぞ老をいかん。
ごからうたにも聞ゆるを徒らに朽ちはてぬる事の今更に悔ゆる
もかひぞなき。前の車のくつがへるを後の車の戒てふ事もあり。
我にならひ給ひそよ。冬は歳の餘りともいふを此の頃の雪を
集め長き夜を空しくないね給ひそ言はまほし。老いては益壯
なるべしと勇みし人は己が類にはあらず。唯寒きに堪へねばひ
たやごもりにこもる程に眠は宵よりきざしてしかも夜深くは目
覺めぬ。冬もうし老もうし。こは老の心をうつすこやいはん、冬
の心をうつすこやいはん。

三 大森求古の故國に歸るに寄す

天地の間にありとあるもの皆おのづからにうけえたる所あり。
今たゞ一つの鳥のうへもていはんに、本草の實を喰ふべきものと、
這ふ蟲を喰ふべきものと、嘴のやう異にて相通はぬあり、かれこれ
を共に喰ふべきあり。相羨むともかなふべからず。いかにこも
せんすべなかるべし。しかはあれど、口あれば喰ふべく、肩あれば
着るべし。肩ありて着ず、口ありて喰はざるは、誰があやまちぞ。
上が上より下が下まで身のほごにつきて世のわたらひをな
すべきための心ばせといふものあり、手足あり。これはたかの嘴
のごと天の與ふる所にして、意を用ひて手足を休むるもあり、手足
を動かして意を用ひざるもあり。ごもに働かすべき際もあらん。

閑田文章

三五

木によりて魚を求む
以二若所^レ爲、求^レ若所^レ欲、猶^レ緣^レ木而求^レ魚也(孟子、梁惠王篇) 資規 蒿蹊の子。

送るに言をもてす
贈^レ人以言、重^レ于金石珠玉(荀子、非相篇) 易さゝりて君子居^レ易以俟^レ命(小人行險以徵^レ幸(中庸))

さればうけえたる所のまに、士農工商、おのれ、が業を守らひつとめなば、まごしごても飢ゑこゝゆるには及ばず。木つ、きの木の裏の蟲を求むるにはたらじを、暮ると明くこに怠りながら、幸福を求むる人は、木によりて魚をもとむるにもたぐふべくなん。こ、に男資規の交をむすびし求古ぬし、年ごろ都に遊びながら、志を得ず、事たがひのみゆく、に、近き年となりて、故郷のうからはらから皆ほろびて、繼ぐべき人なければ、強ひて歸り給はんことを催す人あるからに、力なく出立たんとし給ふに臨みて、何にまれ、心の守になるべき言を述べてよ。と求め給ふ。

おのれもこより才拙きが上に、老のならひのもの忘れ草心にしげりて、ふつにいふべきことを知らず。しかはあれど、送るに言をもてすなるは、古のよしとする所なれば、もだしもえあらで、言ふりたれど、易きにて命を俟ち、身を懈らずつとめ給はんことをす、

む。か、らばその家を起し給はんも難きにあらじ。はた年月都に馴れて、故郷ながら鄙の住居のものうからんもさることなれど、こもまた何か。天に月あり、地に花あり、四つの時の移り變るおのづからの景色をたのみて、心をのばへ給へや。

よしやゆけみやこも鄙もこ、ろだに
やすくしへなばやすからん世を

又弛めて張らざる文武はせず、張りて弛めざる文武はあたはずといふことをおもひて、

一つきの酒におもひをやりてまた
なすべきわざはよくつとめてよ

といふは、享和改元春三月なり。

唯物補(フルル) 唯物補(フルル) 唯物補(フルル)

弛めて張らざる
張^レ而^レ弛^レ也、文
武^レ非^レ能^レ也、弛
而^レ張^レ也、文
武^レ非^レ能^レ也、
一弛^レ也、文武
也、(禮記)

石原正明

尾張の人、蓬
堂と號す。初
め本居宣長の
門に入り、後
事せり。一に
に造詣深く、
自ら一家の古
難者流といひ
を善くし、和
草一萬首に及
ぶ。文政四年
（約一〇〇年）
前、歿す。年六
二。年々隨筆
は、享和元年
降、四年間の
筆なり。六卷
あり。

散るぞめて
たさ
残りなく散る
ぞめでたき櫻
花ありて世の
中ば（古今集）
讀人しらす

年々隨筆

石原正明

一 花ご紅葉

散るぞめでたきと詠みしもこそわりなり。櫻のさかりは、たゞ二日三日ばかり、あまりあへなき心地はすれど、また來ん春はご心いられして待たるゝも、久しからぬ故ぞかし。唐桐ごいふもの、葉のさま涼しげに、花の色いごめでたけれご、夏のなかばより秋すぐるまで、たゞ同じさまに咲きたるにあきはてて、ごく枯れよかしごさへぞ思はるゝや。
さくらの花まち遠なるころ、ごぶしてふもの、のまづ咲き出でたるが、それかごばかり似かよひて、いごうれし。この花を人におくるごて、

時しあれば
讀人しらす。

續詞花集

二十卷、藤原
清輔撰。

時しあればごぶしの花もひらけたり

君がにぎれる手にかゝれかし

續詞花集に見ゆ。この花の歌いごめづらし。

長月つごもり、神無月ついたち、山ふごころの少しゆほびかなるあたりを行くこそおもしろけれ。もみぢ紅なる、黄なる、濃き、薄き、匂ある、にほひなき、おのがさまの情にて見ごころ多かり。又常磐木のこき緑なるに、下葉のいひしらず染めたるなごいとをかし。江戸のあたりにては、目黒、すがたみの橋、さてはこの園の中。もみぢは楓、なほみぢりなるに、たゞ一しほ今ぞ染めつらんごおほしくつやご匂へる二藍の色めでたし。いと濃く緋色に染めなしたるもをかし。今の世には、もみぢごいふ名を己がものにぞしたる、すぐせいご尊しかし。梶はめでたけれご、葉のさまうるはしうて懐かしげなし。ぬるでは品くだりにたり。柿の葉の

チ

前世紀に於ける
佛蘭西の文學
フクロイハル
フクロイハル

目黒

東京府荏原郡
目黒村

すがたみの
橋

東京府豊多摩
郡戸塚村にあ
り。

作者の家の
園。品川にあ
りき。

年々隨筆

過去 三世因果
未來

五戒

不殺生

不偷盜

不邪淫

不妄語

不飲酒

前もこれし是も
行りし者人同し
序も言はれり

不忍の池
上野公園の傍
にある池。

上野
上野公園、東
京山下谷區に
あり。

霜より後まで散りのこりたるが漆もてぬりたらんやうに照り光りて、たゞ二葉ばかり見ゆる、いとめづらかなり。黄なるは銀杏。

二 上野

(二の卷)

上野は時どなくよろし。花の幾千本どなきが、ときは木に立ちまじりたる、嵐山おぼえてをかし。夏はいとくしげりあひて、日かげうごきに、下枝ひまあるかたより、不忍の池のはちす、ごころ狭う咲きみちたるがほの見ゆるに、追風いと涼しうて、さご匂ひ來る、いとうれし。紅葉のころ、またいはん方なし。(二の卷)

三 朝夕

夕やまさりたらん、村雨なごりなく霽れ、風いと涼しうて、山のはの雲いと白う、わざとならずごころくく懸れるに、いさよふ月の

今いづべきにやあらん、にほひうつりて見ゆる。朝やまさりたらん、峰の松原こき緑なるに、あかねの色もゆるやうにて、日のなからばかりさし出でたる。

曉いとよきものなり。かう世ばなれたる里ながら、晝のほどは、ごかくまぎる、ごともあり。宵のほどは、ひと日のつかれごり集めてねぶたきを、丑みつなごいふほどより起きいでて、書にむかひたる、四方にはいさゝかの物音もなく、いと心すむわざなり。冬はひまもる風のと寒きに、埋火かきおこすほど、遠山寺の鐘の音たゞこゝもごに聞えなざる、もいとゞ浮世遠き心地ぞする。春は、小雨そぼく、ごふりて、絶えくゝなる玉水の、かしの枯葉にかかる音する。夏は蚊こそうるさけれど、まきの板戸もさゞでおきたるに、廿日餘の月窓ふかくさし入りたる。秋は、かりがね、きりぎりすいとあはれにて、われもごもになきあかさんごす。(一の卷)

松の落葉

藤井高尙

一 ものしりびご

こゝの書はさらなり、からのにまれ、天竺のにまれ、書をよみあきらめたるを、その道々のものしりびごといふべし。さる人は、あだしびごよりすぐれて、わが世の限りよきことをなさんご、おもひつごむべきことになん。さいふは、いづれの道も、あしきことなすをいさめ、よきことすべきやうをすゝめをしふる一筋なるに、それをあきらめしり、人のしるべをもするもの、自らはさせざらんは、天地の神いみじうにくみたまひ、ごがめたまひ、世の人も、いたくそしるべき事なればなり。まして、あしきことしたらんは、その罪かいなでの人よりは千重まさりなんかし。

藤井高尙
 松の屋と號
 津宮の祠正五位
 下長門守に居
 ぜらるる本任
 宣長に學び
 究むる國文
 特に出たり
 名ありて
 保教授す
 九年十月
 筆松の落葉
 外松の種
 種文集
 り外松の種
 種文集
 り外松の種
 種文集

二 ものまなび

いにしへご今ごは事ごなるごも多かれごも、ものしれば、智ごいふものほごごに大きになれば、おもひはかりせまらずして、古かゝりつれば今はかうごしてこそごなみならぬをかしきかうがへも出で來ぬべく、よき人になるわざにしあれば、上なくたふごきものになん。かくめでたきものなるを、鳥獸はすぐれたるもえせず、わくらには人に生れて學ばでやあるべき。

しかにはあれごも、學びたるがなかごにしらぬよりはあしきごごもあり。おのがものしれる程を見え知られんごして、かりそめのごごばにも、人のえ聞き知るまじきごをいひ、おももちけしきほこりに、人をばおごしめなごす。こはなまものしりの上にあるごごにて、いごごにくげなりかし。

人は心の底つよくて、うはばはものやはらかに、大かたのことはおのが立てたる趣ありても、あらはにけやけく人と争はず、おもひのごめて、やう／＼にもものすべくなん。かく心得て、このまなびに、孔子のをしへをとりそへてもものしたらんには、つゆの難なく、わが身のためはさらにもいはず、世のためにもなることぞかし。ものまなびといふものは、する人の心得によりて、よしあしいたくことなるものになん。

三 論語

からぶみの百書千書あるが中に、ひこりぬけ出でていはん方なくをかしくめでたきは、この論語といふふみなりこそ思はるれ。さるは、かしこき心のいたらぬ限なき孔子の身の行と、弟子にをしへていはれたる言とを、しるしたる書なればなり。人の身の行の

論語
孔子が弟子及
時人に應答
し、又弟子互
にいはる語を
孔子の歿後
の編纂せる
一もの四書の

あるべきやうを、こまやかにをしへさしたるさまは、天地の中にまたたぐひなかりけり。よきすぢとあしきすぢとは、たれも大かたはおもひわくなれど、その中に重さ軽さのある心しらひの、人の知りえがたき境を、残る限なく、明らかにいひをしへたる書にぞありける。

おのれ、まだいと若かりし程より、身の行の心得にこそ、をり／＼この書を読むたびに、その教をげにさることぞ思ひ信じて、いかでいかに、さやうにせばやと志して年経にければ、拙くてなし得ぬものから、わが身の爲となりぬる事の多かるは、たれも同じ事ぞ、人のためをも思ひて、よその國の書なれど、これをよめこそをしへものするになん。

中島廣足

熊本藩士、
稱太郎、
又平、
大平、
長崎に
國學を
授け、
年二十
に、
文移、
に、
文、
り、
役、
知、
元、
十、
關、
集、

榎園文集

中島廣足

一 閑中春雨ごいふを

花ざかりは更なり、さらでも柳など青やかにうち煙り、うらく
と照りたる日は、蕨土筆などいかならん、野山のさまのみゆかし
く思ひやられて、庵の中には籠り居難きを、人さへゆくりなく訪ひ
來つゝ、近きわたりまで、いざいざ、なごそ、のかすめり。雨の降る
日は、さることも思ひ絶えて、人はた音づれねば、文机にのみよりお
たる、なか／＼にをかしうなん。萱ふける軒は雨の音靜かにて、池
水のあやこまやかなるに、いと深う霞める梢より、翅しをれたる鳥
どもの、そこはかさなく飛びわたるなど、いさいたうをかし。暮れ
ぬれば、ましていとしめやかにて、見る書さへ今ひときは心しみぬ。

風少し吹き出でて、燈臺の火のまた、きたるに、何とも知らぬ花の
香の、ほのかにうちかをりたるなどもをかし。(記文)

二 燕を題にて

いさうら、かなる日、思ふごちうちつれゆく大路に、つばくらめ
のこなたかなた飛びかひて、ふと袖の下を過ぎたる、手にも捕へつ
べくていごをかし。雨のなごりのなほかわかぬ方などに下りゐ
て、ひぢを含みつゝ、童部の走りくるに驚き立ちて、遠く翔りゆくも
をかし。梁に巣くひて、いつの程にかあまたの雛おほしたるが、飛
びくる親を待ちて、口のかぎり開きつゝ、鳴きさわぎたるさまは、い
みじうこそあはれなれ。(記文)

三 秋山

筆蹟

明石海神のこ
はし、白玉は
あまのをさし
ぞかづき出ぬ
廣足

二月の花よ
りも
霜葉紅於二
月花。(杜牧、
山行)

雨すこしうちそゞげぞ、かばかり思ひ立ちつることはさて、うち
つれいづ。降ることもなく霽れぬるは、この頃の空のならひなめり。
いとしげき草葉の露をふみ分け行くも、あながちなる山路なりや。

五
明石海神のこ
はし、白玉は
あまのをさし
ぞかづき出ぬ
廣足

思ひしもしるく、いと濃く染めわたしたる紅葉の、霧の絶間より
見えたるけしき、二月の花よりもこかいひけんやうに、あはれふか
う身にしみて覺ゆるに、夕風寒く吹きおぼる谷のあなたに、いと細
き聲にて遙かにうち鳴きたるは、鹿なりけりと思ふに、いと珍しく、
人々耳立てたる程、二聲三聲鳴きそへたる、あはれいみじき山踏の
かひよと思ふに、おくれし人々もなつかしくなりぬ。(記文)

四 山路の菊

この花開き
て後
不_二是花中偏
愛_レ菊。此花開
後更_レ無_レ花。
(和漢朗詠集、
元稹)

木々の紅葉むらゝ染めわたして、尾花が袖も人待ち顔にうち
招く山道のいとおもしろきに、女郎花蘭などのやうゝうら枯れ
ゆく中より、今咲き初めたる菊の、露もをゝに靡きいでたる、物よ
りここに目に立ちて、いとなつかしう覺ゆ。「この花開きて後。なご
うちずしつゝ、さかしき岩根を傳ひ登るほど、水音さへさやかにて、
やうゝ山深くなるまゝに、谷川の流、岩のはざまなど、異草も交ら
でいと多く咲き亂れたる、濃き薄きさまゝ色をつくして、いとか
うばしく、波にぬるゝ枝さしさへもあはれになつかしきは、まことに
仙人の住家に來たる心地なんせらるゝ。(記文)

五 氷

萩の葉音もうらさびて、ふけゆく夜風のいたう寒きに、とひくる

人もなければ、衾引きかづき打臥したるが、ごみにもいねられぬぞ、老のさがなめる。炭櫃すすびの火もたえくゝにて、いと長き夜のわびしきに、板戸のひまのやうくゝしらみゆくは、あけぬなめりこいと嬉しく、やをら起き出でて開きみれば、有明の月のさしいでたるなりけり。庭の落葉も霜深く見えて、笥の音のほのかなりぬるは、こほりやしぬらんこゝろみに水瓶の瓢ひょうこりてひきあぐれば、手にもさはらず碎けたる氷の、いさゝかつきて上りたるが、月の光にきらめきたる、いと珍らかにをかしうなん。(記文)

六 埋 火

「いと寒きに、火など急ぎおこして、炭もて渡るもいとつきくゝし。」
 少納言の筆すさびに物せられたる、げにさることにて、冬は只これのみぞ、まらうごのあるじまうけにもなりぬめり。雪降り積み

少納言の筆すさび
 火などいそぎおこして、炭もてわたるも、いとつきくゝし。
 少納言の枕草紙

たる日、かねてちぎりしをこふに、思ひしごとくに、南面みなみ清くはらひて、簾高く捲きあげたり。大きやかなる火桶のよきほごにうづめる火に、やがてさし向ひたる心地いみじううれしく、いたり深き主人の心も思ひ知られぬ。かくて何くれの物語するほど、尙炭をこて取り出でたる、手づからさしそふるもをかしきに、大きやかなる齒固はがたなご取り出して、やがてこれにて焼きてこそは。いとふに、雪のさむけさもかつくゝ忘られてなん。(記文)

七 漁 村

海人の住家ばかりあはれなるものはなし。いとたよりなき海邊の、風もたまらぬ松蔭なごに、唯かりそめに造りたる藁屋ごものさま、波うちよせなば、やがて流れもうせぬべう、いとはかなげに見ゆるを、繪に書きすさびたるなごは、なかゝゝにかしきものから、

さて住みなば何心地かせましと、思ひやるだに心細し。
夕つ方など、年老いたるをのこの手がらみしたるが、磯邊に立ち
て、今日はいと遅くもあるかな。なごいひつゝ、沖つ方をまぼりをり。
うまごごもにやあらん、眞砂の上を走りありきつゝ、遊び居たるに、
入日さしたる島蔭より、三つ二つ歸り來る舟の、舵ひき折りてほこ
らしげなるを、老人待ち得顔にうちほゝゑみたるは、さち多かりし
にやと見ゆ。渚によせて飛び下るゝまゝに、綱繰り寄せなど、ごか
くしつゝのゝしるに、男も女も數多出で來て、大きな籠に魚ごも
取り入れつゝ、擔ひもて行くさまは、さはいへど賑はしげなり。く
ぐつめく物もて來て、小き魚三つ四つ乞ひもて行く童などもあり。
すべて人多く立ち込み騒ぎて、舟のあたりかしがましく、さし寄り
て覗くべくもあらず。いと長き綱の、渚にかけ干したるを繰りた
めて、取り入れなど、やうく静まりゆけば、此方彼方、火ごもしたる

透影さへもあらはにて、いとあはれに見ゆ。

一夜宿りて見れば、浪風の響枕をゆすりて、露まごろまれず。曉
方隣の家々目覺して、なりはひの事ごもなるべし、あやしう聞き知
らぬ事ごもを、おのがじし聲高にいひかはしたる、げに海人のさへ
づり、珍しうも、をかしうも。(記文)

八 岸頭待舟

いとよき折かなとて急ぎくるに、岸さし放ちたるこそ、いみじう
くちをしけれ。尙暫しく、今一人載せてよ。といふく、走りくる
もあるを、聞かぬ顔して漕ぎゆく後手は、いと憎きものから、さのみ
漕ぎ返したらんには、え堪ふまじくやと思はるゝを、あなにくの船
人や。徒らに人を走らせて。と腹あしげにいひたるこそ、心地なく
は見ゆれ。かたへの石に尻かけて見やれば、蘆間遠くさし分けゆ

くを、かなたの岸にも待遠なるけしきにたゞずみたる人あり。水みづ上かみよりさし下す筏のさまいと静かなるに、中洲の渡には小き舟繫つぎて、四手よっぺこかいふ綱さしおろして、ごかくするなど、いごをかしく、一日もかくて見まほしう覺ゆ。後れたる人々つぎ／＼來あひて立ち待つ程、やう／＼漕こぎもて來たるこそうれしけれ。(記文)

九夜學

寺々の初夜そよの鐘のひゞきもをさまりて、皆人もねたるに、いごうれしう、ごもし火あかくしなして、文机にうち向ひたる、いみじう心すみて、晝見たりしあたりの、何心なくて過ぎにしも思ひ知られて、ふかき心ばへあるくだり／＼もおのづから解き得らるかし。かかげつくしてもなほねぶたさも知らず、油さしそへつゝ見もてゆくに、遠き世の人もたゞさし向ひ語らふ心地す。冊子さうしつくりて、を

かしきふしく、あるはふご思ひ得たることなどをば、墨おしすりつゝ書きつけなごするもをかし。鳥の聲は、夜深きにやご思ふに、いごごとく明けはなれたる、しばしごてうちねぶる夢のうちも、あだしごごならんやは。(記文)

一〇書ごいふを題にてかける詞

夏の日の暮れがたきをも知らず、冬の夜の長きをも覺えぬは、書見る心の樂しさになんありける。さるは道々しきのは更なり、家に記せる何くれの書、又かりそめの筆ずさびなご、唐大和古今ご、いごさま／＼多かる中に、わが立てたる筋ならぬも、見もてゆくままには、えうあることごもありて、かにかくに、あかずおもしろく樂しきは、書にしくものまたなかりけり。遠き世のを見るほごに、われもその世にある心地して、やがてその人々を友ごなして、うち語

鈴屋翁
本居宣長。

らふ心地さへせらるゝを、われも筆とりて、よしなしごごも書き
つくるが、たま／＼もちりぼひ残りて、後の世に傳はらば、今の古を
見るが如く、後の人はた我を友とせんには、千年の末にさへ知る人
ある心地して、いさをかしくなん覺ゆる。萬の心やれるわざ、いと
さはなれど、唯獨り居てあかず、樂しきは、書のほかに又何かはあら
ん。「あるが上にもあらまほしきは書なりけり。」と、鈴屋翁のいはれ
たるは、げにさることこそ。(記文)

國語讀本 卷九 終

山陽中學校
甲 石田 負美

昭和四年三月廿五日
文部省檢定
中學國語科用

大正十三年十二月十六日印刷
大正十四年二月廿一日訂正再版印刷
大正十五年四月一日訂正再版印刷
昭和三年十一月四日訂正再版印刷
昭和四年三月十七日訂正再版印刷
昭和五年二月十八日訂正再版印刷
昭和六年二月二十七日訂正再版印刷

昭和國語讀本
改訂版

卷數	定價	昭和六年臨時定價
一、二、三	各金四十七錢	金七十四錢
四、五、六、八	各金四十六錢	金七十三錢
七、九、十	各金四十五錢	金七十一錢
四	金四十四錢	金七十一錢



發行所

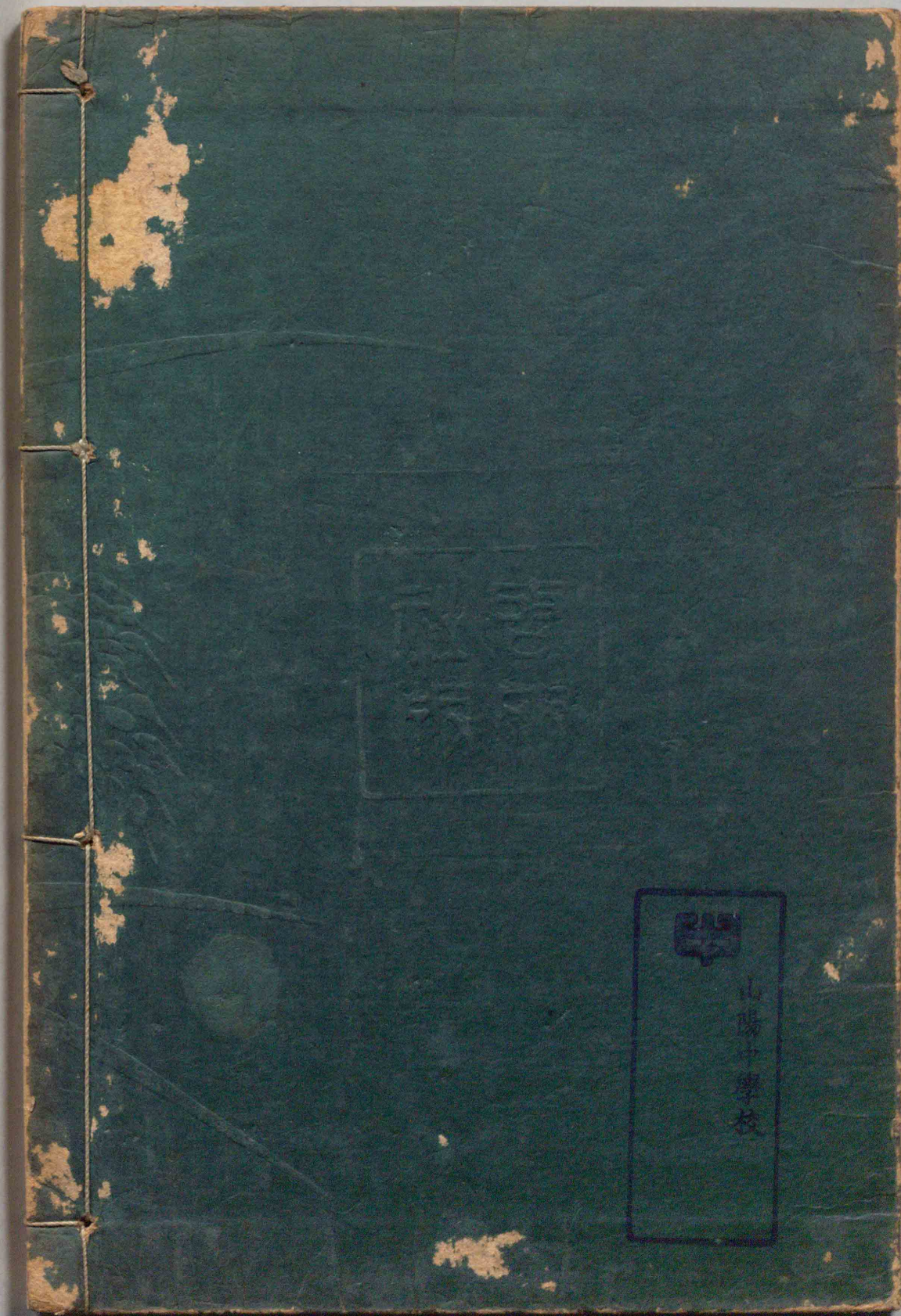
株式會社 啓

株式會社 成

電話銀座(57)二四九四番
振替東京一二〇五五番

東京市京橋區銀座西七丁目二番地

編輯者 上田 萬年
 同 榮田 猛猪
 同 鹽野 新次郎
 發行所 株式會社 啓 成 社
 右代表者 布 津 純 一
 印刷所 東京市芝區芝浦町二丁目三番地
 株式會社 成 社 印刷部



山陽大学